JAPAN APIC

Since 1975

No.010

1 January 2020

ごあいさつ

一般財団法人 国際協力推進協会
理事長
佐藤 嘉恭

昨年5月、天皇陛下の皇位が継承され、年号が令和と改元され、第126代徳仁天皇陛下が即位されました。そして10月にはご即位を内外に宣言する公式行事が厳かに執り行われました。「国民の幸せと国の一層の発展、そして世界の平和を切に希望します。」とのお言葉が脳裏に刻まれました。令和2年を迎え、改めてお祝い申し上げると共に、皇室の末永いご繁栄を心から祈念致します。

さて、令和元年には私どもAPICにとっても嬉しい出来事がありました。同年秋の叙勲に於いて、長年にわたりAPICの支援者であるカシオ・ミダ前駐日ミクロネシア連邦特命全権大使が「旭日重光章」を受章されました。同氏は大使として日本とミクロネシア連邦との友好関係の促進に大きな貢献をされましたが、モリ同連邦元大統領の首席補佐官としても対日外交関係の発展に寄与されました。ご退官後は民間企業にあって日本との経済関係促進に大きくかかわっておられますが、最近のAPICの事業につき多くのご助言を頂いております。心からお祝い申し上げます。

また、ミクロネシア連邦では昨年5月にパニュエロ新大統領が誕生しました。対日関係を大変重要視されており、APICとの関係では留学生制度による高等教育の機会増大に期待を寄せて頂きました。同大統領の高い評価に応えてゆかねばなりません。

昨年の河野太郎外相のミクロネシア地域三か国のご訪問により、これらの国々の対日期待が一層高まっています。私どもの事業で訪日される太平洋島嶼国の政府要人の発言からも更なる支援を期待する声を耳にします。令和の時代に同地域との関係を一層深め大きな発展を確実にしたいと思うことしきりであります。

令和2年のご多幸をお祈り申し上げます。

APIC の主な動き
[2019 年 6 月～ 12 月]

6 月 8 日	第 11 回国際協力懇話会（駐中華人民共和国駐箚特命全権大使　横井 裕 氏）
6 月 20 日	第 359 回早朝国際情勢講演会（外務省研修所所長（前上海総領事）　片山 和之 氏）
6 月 25 日	ミクロネシア連邦チューク州 ごみ処理関係者の国内研修へ同行（～ 6 月 27 日）
7 月 7 日	カリコム海上保安関係者招待計画（～ 7 月 13 日）
7 月 18 日	第 360 回早朝国際情勢講演会（前駐オーストラリア連邦特命全権大使　草賀 純男 氏）
7 月 21 日	サモア財務相・次官招待計画（～ 7 月 27 日）
7 月 25 日	第 12 回国際協力懇話会（金融・世界経済に関する首脳会合担当特命全権大使　冨田 浩司 氏）
7 月 28 日	ミクロネシア・チューク州若手リーダー（観光）招待計画（～ 8 月 4 日）
8 月 4 日	リッチ神父招待計画（～ 8 月 10 日）
8 月 18 日	上智大学曄道学長のカリブ諸国訪問に同行（～ 8 月 28 日）
8 月 24 日	ミクロネシア・エクスポージャーツアー（～ 9 月 6 日）
9 月 13 日	APIC 事務所移転
9 月 19 日	第 361 回早朝国際情勢講演会（外務審議官（経済）　山﨑 和之 氏）
9 月 20 日	第 2 期ザビエル留学生リサさん及び第 1 期 MCT 留学生ブラッドさん、バーサさん 卒業式
9 月 21 日	第 3 期 MCT 留学生アネットさん、エルウンさん 入学式
9 月 29 日	バルバドス創造的経済・文化・スポーツ大臣招待計画（～ 10 月 5 日）
10 月 15 日	海士町と連携協定を締結
10 月 17 日	第 362 回早朝国際情勢講演会（外務省欧州局長　正木 靖 氏）
10 月 19 日	太平洋・カリブ記者招待計画 2019（～ 10 月 30 日）
10 月 21 日	フィジー共和国大統領　APIC 佐藤理事長と会談
11 月 3 日	ミダ 元ミクロネシア連邦大統領首席補佐官招待計画（～ 11 月 14 日）
11 月 6 日	ミクロネシア短期大学・学生招待計画（～ 11 月 21 日）
11 月 11 日	ミクロネシア連邦大統領歓迎夕食会
11 月 17 日	ジャマイカ外務・貿易省二国間関係局次長招待計画（～ 11 月 23 日）
11 月 21 日	第 363 回早朝国際情勢講演会（外務省中東アフリカ局長　髙橋 克彦 氏）
12 月 19 日	第 364 回早朝国際情勢講演会（外務省経済局長　山上 信吾 氏）

JAPAN APIC No.10

CONTENTS

01 ごあいさつ

太平洋事業

03 **フィジー共和国大統領 APIC 佐藤理事長と会談**

04 **ミクロネシア連邦大統領 歓迎夕食会**

05 **ミダ 元ミクロネシア連邦 大統領首席補佐官招待計画**
— ミダ氏旭日重光章受勲 —

特集 海士町との連携

07 **APIC ×海士町 連携協定締結**

09 太平洋諸国リーダー招待計画
ミクロネシア・チューク州 若手リーダー（観光）招待計画

11 八王子市による JICA 草の根技術協力事業
ミクロネシア連邦チューク州 ごみ処理関係者の国内研修へ同行

13 太平洋諸国リーダー招待計画
サモア財務相・次官招待計画

15 ミクロネシア・エクスポージャーツアー

17 ミクロネシア短期大学・学生招待計画

19 リッチ神父招待計画

カリブ事業

21 上智大学曄道学長のカリブ諸国訪問に同行

23 カリブ諸国リーダー招待計画
カリコム海上保安関係者招待計画

25 カリブ諸国リーダー招待計画
バルバドス創造的経済・文化・スポーツ大臣招待計画

27 カリブ諸国リーダー招待計画
ジャマイカ外務・貿易省二国間関係局次長招待計画

29 第 4 回「ハイチ便り」～ハイチの最近の政治情勢～
在ハイチ日本国大使（当時）　八田 善明　氏

太平洋・カリブ事業

33 太平洋・カリブ記者招待計画 2019

ザビエル留学生奨学金

37 第 2 期ザビエル留学生＆第 1 期 MCT 留学生が上智大学・大学院を卒業

38 第 3 期 MCT 留学生　上智大学大学院に入学

若い世代の育成

39 APIC インターン生受け入れ事業

41 APIC インターン OB の声

42 APIC 早朝国際情勢講演会／ APIC 役員名簿／ザビエル高校留学生奨学金制度へのご寄附のお願い

今号の表紙写真

マーシャル諸島
撮影者：フロイド・K・タケウチ
Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

※記事本文に掲載されている役職・機関名は、事業もしくはインタビュー実施時点における名称を採用しています。

NOV 11

ミクロネシア連邦大統領
歓迎夕食会

前列中央：パニュエロ・ミクロネシア連邦大統領

２０１９年11月11日、ＡＰＩＣ佐藤嘉恭理事長はミクロネシア連邦第９代大統領デイビッド・パニュエロ氏の来日を祝し、歓迎夕食会を実施しました。パニュエロ大統領は２０１６年２月に実施したＡＰＩＣの「太平洋若手リーダー招待計画」に参加しており、当時は連邦議員として来日しました。

夕食の席で、佐藤理事長はミクロネシア連邦と日本が長年培ってきた絆について言及するとともに、ＡＰＩＣのザビエル留学生奨学金事業の意義と可能性について説明を行いました。

パニュエロ大統領からは、ＡＰＩＣが行ったプログラムが自分のキャリアに大きな影響を与えたこと、そしてそのプログラムをきっかけに日本とミクロネシア連邦をつなぐ架け橋となれたことについて感謝の辞を述べました。また、ＡＰＩＣが行うミクロネシア連邦と日本の絆を強化する事業への感謝を述べるとともに、これからもＡＰＩＣの事業を支援する意向を明らかにされました。

夕食会での大統領による挨拶（APIC 和訳）

私たちは、今夜、この場所で再び APIC と絆を築けたことをミクロネシア連邦の代表として心より感謝いたします。今この場所にいることができ、私の心は歓喜に満ちているとともに、APIC が行うミクロネシア連邦と日本の絆を強化する事業をとても誇りに思います。

2016 年 2 月に参加した APIC のプログラムを通して、日本の国造りの過程にみられる思いやりの精神や相手に敬意を払うことの大切さを感じることができました。それが強く、優しい国たる所以なのだと身をもって実感いたしました。

あらためて APIC が日本とミクロネシア連邦間の絆の醸成に尽力し、特別な関係を築きあげてきたことに対し、心より御礼を申し上げます。また、天皇陛下の「即位礼正殿の儀」の際には、即位を心よりお祝い申し上げるとともに、令和という新時代、あるいは「美しい調和（beautiful harmony）」ともいわれる時代の始まりに立ち会うことができ、大変光栄に思います。

儀典当日の朝は風が強く雨が降っていました。しかし私たちが着席したその瞬間、空が晴れ、太陽が私たちを温かく包んだことを今でも鮮明に覚えています。日本という国、そしてその偉大な国民はまさに天に見守られているのだと感じました。

私たちは日本という大切な友を持てたことを大変誇りに思うとともに、その心の寛大さと日本の思いやりが他国の尊敬の念を集める理由なのだと実感いたしました。

OCT 10

フィジー共和国大統領
APIC 佐藤理事長と会談

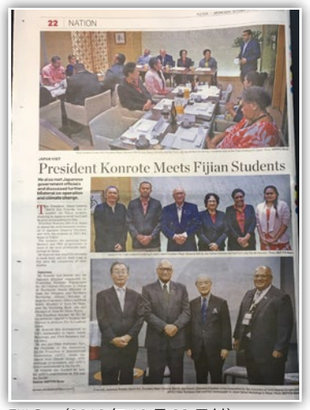
左から：APIC 荒木理事・事務局長、コンロテ大統領、APIC 佐藤理事長、マタイトガ駐日フィジー共和国大使
（Photo Credit: Embassy of the Republic of Fiji）

２０１９年10月21日、フィジー共和国のジオジ・コヌシ・コンロテ大統領がＡＰＩＣ佐藤嘉恭理事長と会談しました。佐藤理事長は訪日歓迎の挨拶に続いて、フィジー共和国独立50周年及び日本との外国関係樹立50周年についての祝意を表しました。

大統領からは、これまでのＡＰＩＣの支援に対する謝意を述べられました。特に、環境問題（気候変動や廃棄物管理）は同国にとっても重要課題であり、今後もＡＰＩＣの支援を期待する旨に言及されました。

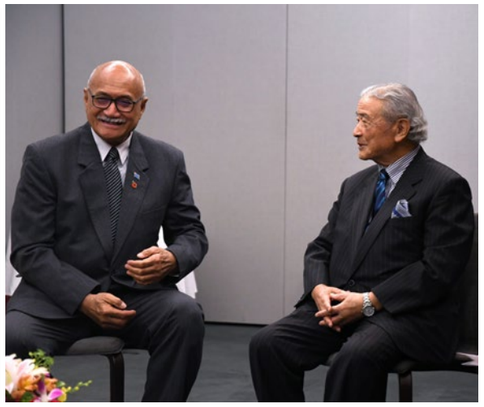
佐藤理事長からは、日本も島国として、太平洋の島嶼国と共通の課題を抱えており、ＡＰＩＣとしてもこうした地域との意見交換を支援していきたいと述べました。また、10月19日～30日の間に実施していた「太平洋・カリブ記者招待計画」のほか、毎年1月に実施している「太平洋・カリブ学生招待計画」などでフィジーからの記者や学生を招待している旨の説明がありました。

なお、今回の会談について、現地新聞（Fiji Focus 及び Fiji Sun）で紹介されました。



Fiji Sun（2019 年 10 月 23 日付）

Fiji Focus（2019 年 10 月 23 日付）



左から：APIC 佐藤昭治常務理事、ジンジャー・ミダ氏、カシオ・ミダ氏、APIC 佐藤嘉恭理事長

ミダ 元ミクロネシア連邦大統領首席補佐官招待計画

――ミダ氏旭日重光章受勲――

２０１９年11月3日から14日の日程で、ミクロネシア連邦より、カシオ・ミダ氏とジンジャー・ミダ氏を招待しました。カシオ・ミダ氏は以前、駐日ミクロネシア連邦大使を務めたのちに、エマニュエル・モリ大統領時代に大統領首席補佐官として活躍し、その後も日本とミクロネシア連邦の関係の深化に貢献してきた人物です。ご夫人のジンジャー・ミダ氏は郵政長官として活躍するミクロネシア連邦の閣僚です。カシオ・ミダ氏は２００７年離日以来何度か来日していますが、ジンジャー夫人は12年ぶりの来日となりました。

今回の訪日では、11月7日にカシオ・ミダ氏が叙勲伝達式に出席したほか、駐日ミクロネシア連邦大使館やミクロネシア短期大学（College of Micronesia-FSM）と単位互換協定を結んだテンプル大学ジャパンキャンパスの訪問など、日本とミクロネシア連邦との外交や親善で関係の深い団体を訪問しました。また、日本の観光としては江戸東京博物館や、ミダ夫妻が日本に滞在していた時には未完成だった東京スカイツリー、日本オリンピックミュージアムなどを訪問し、日本に関する知見を広める機会を持ちました。

11月5日の午後、ミダ夫妻はＡＰＩＣ事務所を訪れ、佐藤嘉恭理事長と佐藤昭治常務理事が同席する中、ＡＰＩＣの事業などについてのブリーフィングを受けました。ご夫妻は適宜質問され、ＡＰＩＣのプロジェクトと協力しながら、ミクロネシア連邦と日本の関係強化に向けて意見の交換をしました。その後、ザビエル留学生、ＭＣＴ留学生が学校生活を送る上智大学四谷キャンパスを見学し、コンパクトながらも充実した施設や利便性の高さ、さらに百年を超える歴史を知り、感銘を受けた様子でした。夕方には駐日ミクロネシア連邦大使館へ表敬訪問をし、フリッツ大使や大使館職員の方から温かい歓迎と叙勲のお祝いの言葉があった後に、和やかな雰囲気の中で食事を共にしました。

11月7日の午後には、皇居で叙勲伝達式があり、ミクロネシア地域からは初となる旭日重光章を安倍総理大臣より授与されました。その後、ご夫婦で天皇陛下に拝謁しました。今回の叙勲はミダ氏が長年、ミクロネシア連邦と日本の架け橋となり、両国の関係の強化に尽力した功績が認められ、受章が実現した形となります。この様子はミクロネシア地域の新聞やミダ氏の母校のＳＮＳでも大きく取り上げられ、多くの人々が叙勲を祝いました。

テンプル大学ジャパンキャンパスにて

11月8日は、叙勲祝いのためにＡＰＩＣ佐藤理事長が東京倶楽部にて夕食会を開催しました。夕食会にはフリッツ駐日ミクロネシア連邦大使や外務省幹部、ＡＰＩＣの理事や評議員などが集まり、ミダ氏の功績と叙勲をたたえました。ミダ氏からは、佐藤理事長と佐藤常務理事のミクロネシア連邦への支援や、堀江良一 前駐ミクロネシア連邦日本国大使による叙勲への推薦に対して丁寧に感謝の言葉がありました。ご挨拶の中では叙勲を受けたことによって、これまで以上に両国の関係の発展に尽力するというミダ氏の決意も含まれており、出席者からはあたたかな拍手が送られました。

11月6日、11日にはテンプル大学ジャパンキャンパスを訪問し、キャンパスの移転を祝うレセプションや日本校のストロナク学長によるキャンパスツアーおよびブリーフィングを受け、ミクロネシアの若い世代の教育に関する意見交換の機会も持つことができました。ミダ氏は帰国後、ミクロネシア連邦でＡＰＩＣの地域代表を務め、ＡＰＩＣの事業に協力し、引き続き両国関係のさらなる発展のために尽力する予定です。

（文責：喜多）

The Kaselehlie Press — November 11 - 24, 2019 — 3

APIC congratulates former FSM Ambassador Kasio Mida on receiving Japanese Imperial Honors

TOKYO, Japan – The Association for Promotion of International Cooperation (APIC) is pleased to extend its congratulations to Ambassador Kasio Mida, Sr., former Ambassador to Japan from the Federated States of Micronesia, upon his having been bestowed The Order of the Rising Sun, Gold and Silver Star, by the Honorable Shinzo Abe, Prime Minister of Japan.

The honor is one of the highest awards that can be given to non-Japanese citizens for their service to promote good relations with Japan. APIC is a private foundation based in Tokyo, Japan that develops programs and initiatives to strengthen relations between Japan and the nations and people of the Caribbean and Pacific Islands.

Ambassador Mida is the first citizen of the FSM, and the other nations of the northwest Micronesia region, to be awarded The Order of the Rising Sun.

"There are few people more deserving of this high honor than Ambassador Mida. He has long been an active proponent of close ties between Japan and the FSM," said Ambassador Peter Yoshiyasu Sato, APIC's president and a career diplomat in Japan's foreign service. "Everyone who knows Ambassador Mida agrees with me."

Following the presentation of the Order of the Rising Sun, Gold and Silver Star by the prime minister, Ambassador Mida had an audience with Emperor Naruhito at the Imperial Palace on November 7.

APIC hosted a dinner in honor of Ambassador Mida on November 8th at The Tokyo Club, the oldest social club in Japan.

Ambassador Mida served as FSM Ambassador to Tokyo from 2004-2008. He was also nonresident ambassador to the People's Republic of China and Republic of Korea. He previously served as FSM Consul General in Honolulu from 1986 to 2004. After Tokyo, he served as Chief of Staff to FSM President Emanuel Mori.

Currently, Ambassador Mida is an officer of the FSM-Japan Friendship Society, which promotes friendly relations between FSM and Japan and supports Japan's initiatives in the FSM. He has also just become the representative of the Association for Promotion of International Cooperation in the FSM, at the request of APIC President Peter Yoshiyasu Sato.

Ambassador Mida is a graduate of Xavier High School in his native Chuuk state, and of Rockhurst College in the United States. He is married to the former Ginger Porter of Pohnpei state. She currently serves as FSM Postmaster General. They have nine children.

New JICA Technical Cooperation for FSM Department of Health and Social Affairs aims at elimination of Lymphatic Filariasis

JICA

August 23, 2019
Palikir, Pohnpei- Mr. Marcus Samo, Acting Secretary of National Department of Health and Social Affairs (DHSA) and Mr. Shinji SHIBATA, Resident Representative of JICA FSM signed the Record of Discussions (hereinafter referred to as R/D) between the two parties on August 23, 2019 setting in motion "the Project for Elimination of Lymphatic Filariasis in the Pacific Region". The implementation of the project starts on the date of signature and ends on the 28 of February 2022.

This project is one of six sister Lymphatic Filariasis (LF) elimination projects being implemented throughout the Pacific Region including other countries such as Fiji, Kiribati, Papua New Guinea, Samoa and Tuvalu. By collaborating with the World Health Organization's (WHO) Pacific Program Elimination Lymphatic Filariasis (PacELF), the LF Elimination Project is expected to be a huge contribution to people's health in FSM.

The FSM Department of Health and Social Affairs has collaborated with JICA and WHO in the movement to eradicate LF from the FSM since 2001. JICA has donated test kits and medical supplies with all equipment passing inspection upon arrival by FSM Immunization program. The test kits were and are still being utilized during campaigns and surveys throughout FSM. With this new project, JICA continues its support in contributing to healthy lives and wellness in FSM. JICA recognizes the health sector as a priority issue in the FSM and will continue to cooperate with FSM Department of Health and Social Affairs and provide support in this area.

THE NEXT ISSUE OF THE KASELEHLIE PRESS WILL BE RELEASED ON:
November 25, 2019
Deadline for submission of articles or advertisements for this issue is the end of working hours on:
Wednesday, November 20, 2019

Marianas Variety — MICRONESIA'S LEADING NEWSPAPER SINCE 1972

CNMI | REGIONAL NEWS | COMMUNITY BULLETINS | VARIETY FEATURES | ADVERTISING | CONTACT US | GUAHAN NEWS

THURSDAY, NOVEMBER 21, 2019 4:07:57PM.

REGIONAL NEWS

Former FSM Ambassador Kasio Mida receives Japanese imperial honors

Category: Pacific/Regional News 08 Nov 2019

Click to enlarge

TOKYO, Japan (Press Release) — The Association for Promotion of International Cooperation is pleased to extend its congratulations to Ambassador Kasio Mida Sr., former ambassador to Japan from the Federated States of Micronesia, upon his having been bestowed the Order of the Rising Sun, Gold and Silver Star, by Shinzo Abe, prime minister of Japan.

The honor is one of the highest awards that can be given to non-Japanese citizens for their service to promote good relations with Japan. APIC is a private foundation based in Tokyo, Japan that develops programs and initiatives to strengthen relations between Japan and the nations and people of the Caribbean and Pacific Islands.

Ambassador Mida is the first citizen of the FSM, and the other nations of the northwest Micronesia region, to be awarded the Order of the Rising Sun.

"There are few people more deserving of this high honor than Ambassador Mida. He has long been an active proponent of close ties between Japan and the FSM," said Ambassador Peter Yoshiyasu Sato, APIC's president and a career diplomat in Japan's foreign service. "Everyone who knows Ambassador Mida agrees with me."

Following the presentation of the Order of the Rising Sun, Gold and Silver Star by the prime minister, Ambassador Mida had an audience with Emperor Naruhito at the Imperial Palace on November 7.

APIC hosted a dinner in honor of Ambassador Mida on Nov. 8 at The Tokyo Club, the oldest social club in Japan.

Ambassador Mida served as FSM ambassador in Tokyo from 2004 to 2008. He was also nonresident ambassador to the People's Republic of China and the Republic of Korea. He previously served as FSM consul general in Honolulu from 1986 to 2004. After Tokyo, he served as chief of staff to FSM President Emanuel Mori.

Currently, Ambassador Mida is an officer of the FSM-Japan Friendship Society, which promotes friendly relations between FSM and Japan and supports Japan's initiatives in the FSM. He has also just become the representative of the Association for Promotion of International Cooperation in the FSM, at the request of APIC President Peter Yoshiyasu Sato.

Ambassador Mida is a graduate of Xavier High School in his native Chuuk state, and of Rockhurst College in the United States. He is married to the former Ginger Porter of Pohnpei state. She currently serves as FSM postmaster general. They have nine children.

The Marshall Islands Journal – Friday, November 15, 2019 — 33

Japan honors FSM ambassador

The Association for Promotion of International Cooperation (APIC) congratulated Ambassador Kasio Mida, Sr., former Ambassador to Japan from the Federated States of Micronesia, upon being bestowed The Order of the Rising Sun, Gold and Silver Star by Japan Prime Minister Shinzo Abe last week.

The honor Mida received is one of the highest awards that can be given to non-Japanese citizens for their service to promote good relations with Japan. APIC is a private foundation based in Tokyo that develops programs and initiatives to strengthen relations between Japan and the nations and people of the Caribbean and Pacific Islands. Ambassador Mida is the first citizen of the FSM and the other nations of the northwest Micronesia region, to be awarded The Order of the Rising Sun.

"There are few people more deserving of this high honor than Ambassador Mida. He has long been an active proponent of close ties between Japan and the FSM," said Ambassador Peter Yoshiyasu Sato, APIC's president and a career diplomat in Japan's foreign service. "Everyone who knows Ambassador Mida agrees with me."

Kasio Mida wears medals signifying Japan's highest imperial honor, The Order of the Rising Sun, Gold and Silver Star. He is pictured with his wife, Ginger Porter Mida,who is FSM Postmaster General. Photo: Mooko Kita/APIC.

Following the presentation of the Order of the Rising Sun, Gold and Silver Star by the Prime Minister, Ambassador Mida had an audience with His Majesty Emperor Naruhito at the Imperial Palace on November 7. APIC hosted a dinner in honor of Ambassador Mida on November 8th at The Tokyo Club, the oldest social club in Japan.

Ambassador Mida served as FSM Ambassador to Tokyo from 2004-2008. He was also nonresident ambassador to the People's Republic of China and Republic of Korea. He previously served as FSM Consul General in Honolulu from 1986 to 2004. After Tokyo, he served as Chief of Staff to FSM President Emanuel Mori.

Currently, Ambassador Mida is an Officer of the FSM-Japan Friendship Society, which promotes friendly relations between FSM and Japan and supports Japan's initiatives in the FSM. He has also just become the representative of APIC in the FSM, at the request of APIC President Peter Yoshiyasu Sato.

Ambassador Mida is a graduate of Xavier High School in his native Chuuk state, and of Rockhurst College in the United States. He is married to the former Ginger Porter of Pohnpei state. She currently serves as FSM Postmaster General. They have nine children.

今回の叙勲式について、太平洋諸国の様々な現地新聞で紹介されました

海士町との連携

署名を終えた
大江町長（左）と
APIC 佐藤理事長（右）

APIC×海士町 連携協定締結

２０１９年10月15日、島根県海士町とＡＰＩＣは連携協定（Memorandum of Understanding（ＭｏＵ））の締結に合意し、大江和彦町長とＡＰＩＣ佐藤嘉恭理事長により署名式が執り行われました。

本協定は、海士町とＡＰＩＣが相互に緊密に連携することにより、双方の資源を有効に活用した協働による活動を推進し、太平洋・カリブ地域への国際協力の効果的実施と、世界に開かれた学びの町としての海士町の一層の発展を図り、ひいては日本と太平洋・カリブ地域の発展に資することを目的としています。

具体的な連携の対象は、研修員の受入れ、太平洋・カリブ地域の開発課題の解決に裨益する海士町の資源・技術を活用した取り組みの共有、海士町内の学校等における太平洋・カリブ地域に対する理解や国際協力に対する理解の促進などとなっています。

2019 年活動実績

4 月	海士町視察
7 月	ミクロネシア連邦チューク州若手リーダー（観光）招待計画 ＜ P.10 参照＞
8 月	上智大学ザビエル留学生研修
10 月	サモア青年研修計画事前視察団を派遣

連携協定調印式にて

活動実施紹介

サモア青年研修計画

サモア独立国に事前調査団を派遣

女性・共同体・社会開発省 Dr. Leao Talalelei Tuitama 大臣（左）を表敬

ＡＰＩＣは、これまで主に北太平洋の島嶼国（パラオ・ミクロネシア連邦・マーシャル諸島）を中心に支援を行ってきましたが、支援を南太平洋にも広げる観点からサモアの支援を検討しております。地域活性化で成果を上げている海士町において青年を対象とした研修が有効と考え、事業実施にあたり、まず詳細なニーズ把握のために、２０１９年10月５日から13日にかけて、海士町職員他からなる事前調査団を派遣しました。この事前調査では、サモア（特に村落共同体）の発展や経済構造強化に資することを念頭に、海士町がサモア独立国に対して行う研修ニーズの確認および研修内容・研修員人数・研修期間等について、協議しました。

今後は、サモアのローカルエコノミーに資する第一次産業の担い手を育成（起業・既存の産業の活性化・ブランド化）するパイロット事業により、サモアの雇用増大に貢献することを目的とした青年研修を、２０２０年５月ないし６月に実施する予定です。

上智大学ザビエル留学生

海士町にて研修を実施

海士町の保健福祉センター「ひまわり」でのイベントにてコスラエスープの店を出店する学生たち

２０１９年８月19日から25日にかけ、ザビエル留学生が海士町を訪問し、海士町役場による全面的な協力のもと、約１週間の研修を実施しました。この研修は、上智大学で学校生活を送っているザビエル留学生を海士町へ派遣することにより、離島での生活やお祭り、ホームステイなどを経験し、日本に対する知見を広める目的で行われました。初回となる今回は３名の留学生に加え、２名のＡＰＩＣインターン生が引率しました。

研修中、学生たちは海士町の人々から温かな歓迎を受け、地域コミュニティの一員として受け入れられたことが非常に印象に残ったようです。海士町の文化や歴史を学び、人々と交流する一方で、海士町の人々にも自分たちの母国であるミクロネシア連邦のことを伝える機会を持ち、相互に心を通わせることができました。海士町の持つ、物質的な尺度では図ることができない豊かさと人々の温かさに触れ、普段の東京での生活では決して経験することができない貴重なひと夏の思い出を作ることができました。

JUL 07

太平洋諸国リーダー招待計画
ミクロネシア・チューク州若手リーダー（観光）招待計画

駐日ミクロネシア連邦大使館にて。
前列左から：ケンボー・ミダ氏、クリストファー・ユースタキオ氏、メルバ・アイゼック氏、アドヴィン・アイゼック氏

2019年7月28日から8月4日まで、APICはミクロネシア連邦チューク州より、観光産業にかかわる若手リーダー4名を招待しました。今回招待したリーダーは、L5ホテルオーナーのケンボー・ミダ（Kembo Mida）氏、ブルー・ラグーン・リゾート総支配人のアドヴィン・アイゼック（Advin Aisek）氏、トラック・ストップホテル統括マネージャーのメルバ・アイゼック（Melba Aisek）氏、チューク州商工会議所執行役クリストファー・ユースタキオ（Christopher Eustaquio）氏の4名です。

今回の招待計画では、東京と島根県隠岐郡海士町の2か所で研修を行いました。東京での研修では、各専門家からのブリーフィングを受けるとともに、観光分野の第一線で活躍する者として積極的に意見交換を行いました。また、島根県海士町の研修では、地域文化や地元の食材の特徴を生かしたホテル経営のノウハウを学ぶとともに、日本の離島の一つとして財政面において厳しい状況にあった海士町がいかにして町おこし・島おこしを行ってきたかを学びました。

◆HIS小林健一マネージャーによるブリーフィング及び本社見学

2019年2月に実施された「ミクロネシア連邦観光促進ミッション」にも参加した株式会社エイチ・アイ・エス（H.I.S）小林健一マネージャーよりブリーフィングがありました。小林氏は、旅行代理店を介さずとも格安の航空券やホテルを予約でき、個人で旅行を設計することが可能になっている昨今において、日本人観光客誘致のためには、値段を抑えることだけでなく、その旅行をする「価値」を全面に押し出していく必要があると強調しました。特に、ミクロネシア連邦の場合、手付かずの自然や美しい海などは、まだまだ日本人にとって「価値」があるものであり、インフラの整備、渡航のしやすさを改善することができれば有力なマーケットになりうると述べました。加えて、ミクロネシア連邦にある歴史遺産や同連邦各州の文化などは、そのまま観光資源となりうることも強調しました。これに対し若手リーダーたちはホテルや組織の枠を超えチューク州全体のインフラ整備や観光客受け入れ体制を整えることの重要性について意見が出ました。

滞在中の主なスケジュール

7/28（日）	来日
7/29（月）	APIC ブリーフィング HIS 小林氏によるブリーフィング APIC 主催歓迎夕食会
7/30（火）	駐日ミクロネシア連邦大使館 訪問 赤坂エクセルホテル東急 視察
7/31（水）	日本橋にて紙漉き体験 島根県海士町へ移動
8/1（木）	黒木発電所、 隠岐ハイブリッドプロジェクト 視察 隠岐島前病院 視察・講義 西ノ島コミュニティ図書館見学
8/2（金）	大江和彦 海士町長 表敬訪問 海士町内視察
8/3（土）	東京へ移動
8/4（日）	離日

◆ミクロネシア連邦大使館でのランチミーティング

駐日ミクロネシア連邦大使館でのランチミーティングでは、末永一等書記官から日本におけるミクロネシア連邦の立ち位置に関するブリーフィングを受け意見交換も行いました。特に、観光分野についての議論の中で、観光客誘致やチューク州で生産できるものを日本に輸出しビジネスを行う構想について話し合いました。観光客誘致に際しては、インフラ整備の重要性に加え、各島々での地元住民による観光客に対する金銭の要求を控えさせるため、一括してそのようなやり取りができるシステム構築の重要性について議論がありました。また、チュークで生産できるものとして、ナマコ・タピオカの加工、タロイモを使った焼酎など日本へ継続的に輸出できる物品の可能性について話し合いました。特にチューク産の焼酎に関しては、未だ試験段階であるものの、その質は優れているものであり、「これからはどのようにして効率的に生産できるか」という議題について意見交換が行われました。

◆赤坂エクセルホテル東急視察

赤坂エクセルホテル東急では、客室や予約オペレーションの視察を行うとともに、同ホテル兵藤支配人と日本やチューク州におけるホテル経営の課題やその解決策について意見交換を行いました。リーダーたちは、同ホテルが「ビジネスホテル」というコンセプトの下、同じレイアウトの客室を大量につくり、経営効率や予約率を上げている点や、限られた空間を有効活用したレイアウトなどに注目し、積極的に質問をしていました。また、ホテルマネジメントについても、チューク州のホテルに共通する課題である「老朽化」などに関する議論がありました。赤坂エクセルホテル東急が、日々そのサービスを提供すると同時に、過去5年にわたり客室の大規模改修工事を実施していることにリーダーたちは着目し、運営と改修の両立を可能にする「工事プロセス」について具体的な説明を受けました。

◆島根県隠岐郡海士町訪問

本プログラムの締めくくりとして、一行は島根県隠岐郡海士町を訪問しました。海士町では「ないものはない」という合言葉のもと、島民一丸となり島おこしに取り組んでいます。リーダーたちは海士町が行う観光分野での取り組みや、コミュニティ開発についての説明を受けました。その中でも特に全国的に有名な海士町産の隠岐牛や岩牡蠣等のブランディング戦略に関心を示しており、チューク州のこれからの発展と海士町のこれまでの成長を重ね合わせていました。

（文責：金原）

上：HIS 本社でのブリーフィングの様子
中：赤坂エクセルホテル東急兵藤支配人との意見交換
下：隠岐島前病院にて

JUN 06

八王子市によるJICA草の根技術協力事業

ミクロネシア連邦チューク州 ごみ処理関係者の国内研修へ同行

2019年6月25日～27日の計3日間、APICは、八王子市によるJICA草の根技術協力事業※の一環として、鹿児島県志布志市および大崎町にて実施された、ミクロネシア連邦チューク州ごみ処理関係者の国内研修に同行しました。

八王子市では、JICA草の根技術協力事業「太平洋島嶼部におけるごみ問題改善 - ミクロネシア・チューク州での協働型2R推進プロジェクト -」として同市の職員をミクロネシア連邦チューク州へ派遣する計画を実施しています。今回は、これまで現地で指導してきたチューク州のごみ処理関係者を研修生として6月16日から29日までの間に日本に招待するもので、数日間、八王子市にて研修を行ったのち、25日から27日にかけて鹿児島県志布志市・大崎町にて研修を実施しました。APICはこの鹿児島県での研修を支援することとなり、研修に同行しました。同地は今後のAPICの招待計画における視察先の候補として検討されています。

大崎町役場でのブリーフィング

◆志布志市のごみ処理及びリサイクルシステム

6月25日、一行は志布志市役所を訪問し、ブリーフィングを受けました。志布志市では住民がごみを27種類に分別していること、それにより同種類のごみを集めることが可能になり、リサイクル率を高められていることについて説明がありました。志布志市では、2000年に分別（当時は19種類）を始めて以来7年で一般廃棄物を80％削減することに成功しています。同市では元々、1990年に建設された埋め立て処理場が15年で満杯になると見込まれたことから、延命策としてごみの分別が始まりましたが、結果として焼却場を建設せずに、高いリサイクル率により持続可能なごみ処理が実現しました。また、志布志市が行うリサイクル・ごみ処理は缶やビン、プラスチックにとどまらず、2005年からは生ごみを堆肥化し、同市の主幹産業である農業に役立てる活動を始めました。これにより、家庭から出る生ごみを農業で使用し、それで出来た農作物を消費者が購入し、それがまた家庭から出る生ごみとなる、という循環が可能となりました。

志布志市役所の住民に対する理解、協力の呼びかけとして、1年間で450回以上各自治会及び世帯を回り、分別・リサイクルについての説明会及びワークショップを行ったとの説明もありました。この取り組みに対しては、チューク州の研修員の関心を集めていました。地域コミュニティの大切さにも言及され、複雑なリサイクルシステムを運営するためには地域住民による意義・目的の理解が不可欠であり、市役所からの説明だけでは足りない部分を地域コミュニティが団結して補っているとのことでした。これに対してはチューク州が抱える地域コミュニティの脆弱性とリンクする部分があり、研修員たちはそれが持つ可能性について興味を示していました。

◆志布志市のごみ処理及びリサイクル施設の視察

研修二日目には志布志市が管理するごみ処理施設及びリサイクル施設の視察を行いました。この施設はリサイクル事業を行うために設立された民間企業であり、市からの委託により運営されています。この施設により約40人の雇用の機会を創出しており、リサイクル処理した資源を販売することにより余剰の利益を生むことにも成功しています。市はこの余剰利益をリサイクル施設より受け取り、教育や福祉に充てるとともに、住民へのリサイクル協力に対する感謝として還元しています。

市の説明では、これらのリサイクルに対する取り組みは全て市民から始まることであり、市民の協力なしでは成しえないことであることが強調されました。また市民と行政が協力しあい、ごみの削減、リサイクル率の向上を目指すことにより、そこから資源が生まれ、自分たちに返ってくるという意識を市民に持たせることが大切だと繰り返されました。

◆大崎町のリサイクルシステム及び市民参加概念

27日は大崎町を訪問し、大崎町役場にてブリーフィングを受けました。大崎町は、ごみの分別品目を志布志市同様27種に分けています。その結果、2007年より現在にいたるまでの12年間、全国の人口10万人未満の市区町村においてリサイクル率日本一を記録しています。さらに2018年にはリサイクル率82％を記録しており、この高いリサイクル率により、大崎町と志布志市では焼却場に依存しないごみ処理を実現しています。大崎町では、ごみ処理にかかる費用を年間で約1億円の削減に成功しています。さらに同市ではこの1億円を市の教育や福祉に充てているとのことでした。

◆志布志市と大崎町の共通事項及びチューク州研修員の反応

今回の視察では志布志市と大崎町を訪問し、市役所からのブリーフィングや実際の現場の視察等を通して実りある研修が行われていました。その中でも、住民と企業、そして行政の協働・連携・信頼は志布志市・大崎町双方が繰り返し主張していたことであり、とりわけ最初の住民による分別の努力がなければ成り立たない事業であるという点については、チュークの研修員たちの大きな関心を引いていた事項でした。また、6月28日に行われた今回の研修を締めくくるラップアップミーティングでは、研修員たちが作成した今後の行動指針を示すアクションプランが発表されました。その中では、上記の三者の連携が含まれており、特に住民のごみ問題解決に向けての積極的な関与及び、行政からの住民に対する説明、協力を促す姿勢などを改善していくことが喫緊の課題として掲げられました。

（文責：金原）

ミーティング後の懇親会の様子

研修で得た学びを踏まえたアクションプランの発表

※ JICA 草の根技術協力事業とは、国際協力の意志のある日本の NGO/CSO、地方自治体、大学、民間企業等の団体が、これまでの活動を通じて蓄積した知見や経験に基づいて提案する国際協力活動を、JICA が提案団体に業務委託して JICA と団体の協力関係のもとに実施する共同事業です。（国際協力機構（JICA）公式サイトより引用）

太平洋諸国リーダー招待計画

サモア財務相・次官招待計画

APIC 主催夕食会にて。左から：APIC 佐藤理事長、井上 在福島サモア独立国名誉領事、シラ駐日サモア独立国大使、遠藤衆議院議員、シリ財務大臣、オスカー財務次官

2019年7月21日から27日にかけて、サモア独立国のシリ・エパ・トゥイオティ財務大臣（The Honorable Sili Epa Tuioti）とオスカー・トーマス・マリエレガオイ財務次官（Mr. Oscar Thomas Malielegaoi）を招待しました。今回の訪日において、現在サモア独立国がＩＣＴをベースにした長期戦略“Vision 2040”を策定中であり、それに関わる実質的な意見交換と視察を行いたいとの希望があり、精力的に数多くの面会や視察を行いました。

◆ＡＰＩＣによる歓迎夕食会

滞在初日の夕方には、ＡＰＩＣ佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会を東京倶楽部にて開催しました。シラ駐日サモア独立国大使、フリッツ駐日ミクロネシア連邦大使、キチナー駐日マーシャル諸島共和国大使のほか、外務省、財務省関係の方々や井上直美在福島サモア独立国名誉領事など関係者が一堂に会する機会となりました。冒頭には、参議院議員通常選挙直後のご多忙の中、遠藤利明衆議院議員（日・サモア議員連盟会長）が挨拶に駆けつけてくださいました。初代東京オリンピック・パラリンピック担当大臣であった同議員からは、オリンピック関連グッズが贈られ、日・サモア関係において活発に意見を交わしました。

◆都内日程

初日に駐日サモア独立国大使館にてシラ大使主催の昼食会があり、午後は浅草観光をしました。二日目には、阿部俊子外務副大臣（当時）、鈴木馨祐財務副大臣（当時）に面会、国税庁では、「日本の税行政」についてブリーフィングを受けました。

三日目には独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）北岡伸一理事長に面会を行い、対外債務、持続可能な漁業、教育、ドローンの利用、プラスチックごみの対応など多岐にわたり意見交換を行いました。その後、東京税関を訪問し、最初に、トラックにコンテナを載せたままＸ線で中身が検査できる青海コンテナ検査センターを訪問し、実際にコンテナの検査の様子を見学しました。サモアでは、アジア開発銀行（ＡＤＢ）の支援により同様の設備を導入予定ということで熱心に耳を傾けました。次に通関部門で、すべてコンピュータ化された輸出・輸入申告手続きについて実際の画面を見ながら説明を受け、その後、監視艇に乗船して墨田川、豊洲市場、オリンピック選手村、品川・大井・青海のコンテナ埠頭を回り、管内の概況説明を受けました。

四日目には太平洋諸島センター（ＰＩＣ）を訪問し、斎藤龍三所長と面会し、ＰＩＣの概要、主催セミナー、過去派遣したビジネスミッションの説明を受けました。大臣からは分野を集中して訪問していただけるとありがたいとのコメントがありました。その後、サモアが策定中のＩＣＴをベースにした長期戦略“Vision 2040”の関連で、東京大学 西和彦教授に面会しました。西教授からは、サモアの経済成長においては直行便の就航、税制優遇、太平洋のＩＴハブ化、若く優秀な人材の呼び込みなどの政策が重要であるなど、様々な提言があり、活発に意見交換をしました。

◆福島県いわき市訪問

最後にいわき市を訪問し、井上直美 在福島サモア独立国名誉領事（常磐興産株式会社代表取締役社長）と面会しました。いわき市内では津波の影響を受けた地域の視察と、ワンダーファームという水耕栽培のトマト農園を視察しました。サモアはニュージーランドからの野菜の輸入を削減し国産化することを検討しているということで、大変関心を持っていました。

（文責：斉藤）

東京税関にて

ワンダーファームにて。井上名誉領事（右から２番目）

福島県いわき市にあるワンダーファームにて

滞在中の主なスケジュール

7/21（日）	来日
7/22（月）	駐日サモア独立国大使館 訪問 浅草 視察 APIC 主催歓迎夕食会
7/23（火）	阿部俊子外務副大臣（当時）と面会 国税庁ブリーフィング 鈴木馨佑財務副大臣（当時）と面会
7/24（水）	JICA 北岡伸一理事長 面会 東京税関 視察
7/25（木）	江戸東京博物館、PIC、日本銀行貨幣博物館 訪問 東京大学 西和彦教授 面会
7/26（金）	福島県いわき市 訪問 井上直美 在福島サモア独立国名誉領事と面会
7/27（土）	離日

ミクロネシア・エクスポージャーツアー

2019年8月24日から9月6日の日程で第5回ミクロネシア・エクスポージャーツアーが実施されました。本年度は上智大学の学生10名と、上智大学短期大学部の学生3名が参加しました。山本浩上智大学短期大学部学長及びAPIC佐藤昭治常務理事（上智大学客員教授）が担当教員として引率しました。

ナンマトル遺跡にて

本年度のエクスポージャーツアーでは、ミクロネシア連邦ポンペイ州に加え、チューク州ウエノ島も訪問しました。ポンペイ州ではCollege of Micronesia-FSM（COM）を拠点とし、現地学生との交流および現地有識者からの特別講義、現地の自然を目で見て肌で感じるフィールド・トリップを行いました。ウエノ島では、そこだけ時間の流れが遅く感じると言われるジープ・アイランドに上陸したほか、上智大学とも関係の深いザビエル高校を訪問し高校生との交流を行いました。

COMで行われた講義では、元ミクロネシア連邦大統領のエマニュエル・モリ氏及びジョン・ハグレルガム氏を筆頭に、現地有識者の方々が講師を務めました。講義の中では積極的に質疑応答が繰り返されました。学生たちは講義終了後も、さらに詳しく知りたい点を講師に聞きに行くなど熱心な姿勢を見せていました。

フィールド・トリップでは、ソケース・マウンテン、ナンマトル遺跡、ケプロイの滝を訪れました。多くのCOM学生がボランティアとしてツアーに同行しました。COM学生はそれぞれ観光スポットの説明に長けており、どのような歴史・逸話があるのか、地元の人にとってそのスポットはどのような存在なのかなどを日本人学生にレクチャーしてくれました。

COM学生寮では、日本とは全く異なる環境で10日間生活しました。学生たちは放課後のスポーツやハイキング、夕食などを通して国籍、文化、言葉に関係なく現地学生と絆を深め合うことができました。

ハグレルガム元大統領による講義の様子

本ツアーの終盤に行われたホームステイでは、学生たちはホストファミリーとともに地元の生活スタイルや味を楽しみ、ミクロネシア人のあたたかさに触れました。日本とは家族構成も規模も違うミクロネシア人の家庭で、現地の人と同じ目線での生活を経験することができました。また、ホストファミリーたちは学生たちがポンペイを旅立つその日、空港まで見送りに来てくれ、寂しくも暖かく、家族愛に溢れた抱擁で別れを惜しみました。（文責：金原）

ジープ・アイランドへ向かうボートにて

ミクロネシア短期大学
College of Micronesia - FSM

1972年にミクロネシア連邦に設置された2年制の大学。教養学科のほか海洋学科、ミクロネシア研究学科などの学科がある。ミクロネシア連邦の各州から学生が集い、ミクロネシア連邦の発展を支える国内唯一の高等教育機関として存在感を示している。

ザビエル高校にて

参加学生の声

上智大学 理工学部2年
大谷 洋輝 さん

私はこのプログラムを知るまで、ミクロネシアという国の名前を聞いたことがありませんでした。実際行ってみると、今までにしたことのない経験をたくさんすることが出来ました。現地の学生は親切で、たくさん助けてもらい、近くの滝などに連れて行ってくれることもありました。寮では夜に、常にどこかで音楽が流れていて、とても楽しげでした。他にもナンマトル遺跡や現地の小学校などにも行きました。

私がミクロネシアで一番印象に残ったのは、人が温かいということでした。それを一番感じたのがホームステイでした。ホームステイでは色々な事を体験できました。ヤシの実を割らせてもらったり、滝に連れて行ってもらって一緒に泳いだりしました。ホストファミリーは常に私が楽しめるようにしてくれました。そして、最後には空港まで送りに来てくれて、私にあなたは家族の一員だから、また帰ってきてねと言ってくれました。本当に優しくて、またここに帰ってきたいと思いました。

大谷さん（中央）

参加学生の声

上智大学 短期大学部1年
松縄 景子 さん

私は今回のツアーに参加するまでミクロネシア連邦という国の存在さえ知りませんでした。想像もつかない生活に不安もありましたが、驚きと感動の連続であっという間の2週間でした。

ミクロネシアには、魚が見えるほどの美しい海、熱帯ならではの植物が生息する森などのありのままの自然があり、そのなかにはナンマトル遺跡や沈船、戦車など歴史がそのまま残されていました。その雄大な姿は今も鮮明に記憶に残っています。

また、ミクロネシアでは、現地の方々の温かさを感じました。ホストファミリーは私の拙い英語を聞き取る努力をしてくれて、沢山話しかけてくれました。ホームステイは初めての経験でしたが、心配していたことが嘘のように楽しい時間を過ごしました。

講義では現地で働く青年海外協力隊の方からミクロネシアにおける教育の現状についてのお話が印象的でした。現地で働いているからこその苦労や悩みは、とても勉強になりました。

ミクロネシア・エクスポージャーツアーから学んだことはとても多く、ミクロネシアでの生活はまさに異文化体験でした。一生忘れられない大切な思い出です。

松縄さん（後列中央）

NOV 11

ミクロネシア短期大学・学生招待計画

テンプル大学ジャパンキャンパスにて

２０１９年11月６日から21日まで、ミクロネシア連邦ポンペイ州にあるミクロネシア短期大学（College of Micronesia -FSM：以下、COM）から学生を４名日本に招待し、上智大学及び麗澤大学にて滞在及び研修を行うミクロネシア短期大学・学生招待計画を実施しました。

本計画は今年で４回目を迎え、これまでに累計16名の学生をCOMより招待しています。本計画はAPICとCOM、上智大学、麗澤大学の間でそれぞれ結ばれた連携協定（MoU）に基づき、APICが学生を招待し、上智大学と麗澤大学にて授業の受講や課外活動、ホームステイを経験します。ミクロネシア・エクスポージャーツアー（15ページ参照）に参加した学生を含め、毎年多くの日本人学生がボランティアとして参加しており、学内だけでなく学外や週末でも積極的な交流が行われています。

◆テンプル大学視察

学生たちは、COMと単位互換制度に関する取り決めを締結しているテンプル大学ジャパンキャンパスを訪問しました。その取り決めにより、COMを卒業した学生はテンプル大学の３年次に編入することが可能です。参加した学生の中には来年卒業予定の者もおり、参考となったようです。校舎の見学だけでなく、同大学で行われているキャリアセミナーなどの講義を受講し、学生食堂でのランチも体験しました。

（文責：金原）

◆交流イベント

週末には日本人学生と共に横浜を訪れ、カップヌードルミュージアムでオリジナルの「マイカップヌードル」の製作体験をした後、国の重要文化財でもある「日本郵船氷川丸」を見学しました。氷川丸の姉妹船である「平安丸」は第二次世界大戦時中、チューク環礁に沈みました。戦争の記憶が薄れつつある中で、氷川丸の見学はとても印象深い思い出となりました。その後、横浜ランドマークタワーに上って、横浜の夜景を堪能しました。招待学生も日本人学生も一緒に過ごす中でお互い打ち解けあい、最後は一日を楽しみ尽くした様子でした。

（文責：松並）

カップヌードルミュージアムにて

◆環境セミナー

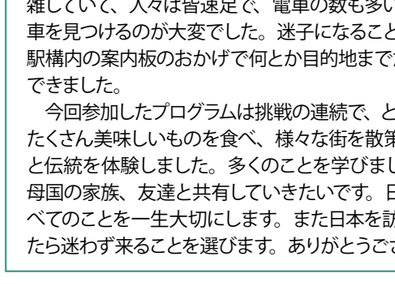
本計画の半ばでは、上智大学で環境セミナーに参加しました。今回は、ミクロネシア地域最大の環境保護団体であるミクロネシア自然保護基金（Micronesia Conservation Trust）のコンサルタントも務めるイアン・ホール氏（上智大学大学院地球環境学研究科博士課程在籍中）に講師をお願いしました。同氏からは、ミクロネシア連邦が直面するごみ処理にかかる課題やその解決に向けた施策、住民レベルでも実践可能なアクションプランについての講義がありました。

約２週間の滞在で、招待学生たちは上智大学・麗澤大学での講義だけでなく、寮生活、日本人学生との交流やホームステイ体験を通じ、たくさんのことを学び、感じ、そして経験しました。最終日の活動報告会では、各学生がプログラム内容を振り返り、上智大学・麗澤大学や、温かく迎え入れてくれたホストファミリーに対しての感謝の言葉のほか、涙を流しながら思い出を語る学生もいました。日本出発日には、絆を深め合った多くの日本人学生が成田空港に見送りに来ており、招待学生たちは一生の仲間に見送られ帰国の途に就きました。

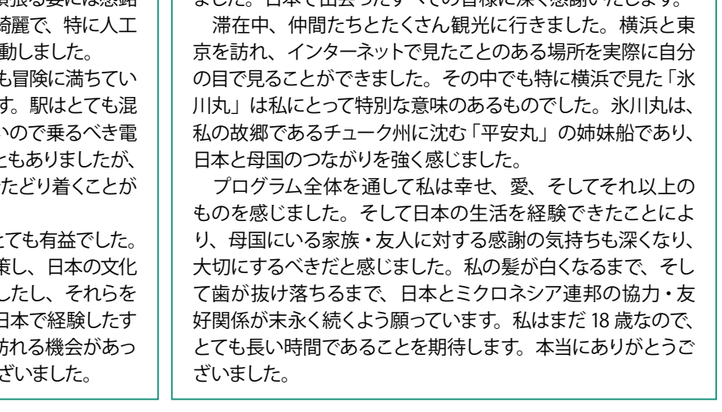
（文責：金原）

滞在中の主なスケジュール

11/6（水）	来日 各大学でのオリエンテーション
11/7（木）	各大学での活動
11/8（金）	テンプル大学ジャパンキャンパスにて キャンパスツアー
11/9（土）	横浜にて学生交流イベント
11/10（日） ～14（木）	各大学での活動
11/15（金）	環境セミナー
11/16（土） ～17（日）	ホームステイ体験
11/18（月） ～19（火）	各大学での活動
11/20（水）	活動報告会・フェアウェルパーティ
11/21（木）	離日



活動報告会で発表する学生


フェアウェルパーティで修了証を受け取る学生たち

参加したCOM-FSM学生の声

プログラムに参加した４名の学生のうち、２名の感想文を掲載しています。（APIC和訳）

セニーシャ・サントス さん
Senniesha Santos

日本は私がずっと行きたいと願っていた国でした。今回のプログラムに参加する４人のうちの１人に選ばれ、ついにその願いが叶いました。

日本での滞在は本当に素晴らしく、驚きと楽しみに満ち溢れていました。今回の旅が初めての海外渡航でしたが、滞在中、怖いと感じたことや危険に思ったことは一度もありませんでした。人々は皆とても親切で落ち着いていて、暴力的な側面は一切見られませんでした。そしてお互いに邪魔することもなく、みな黙々と自分の仕事に取り組んでいました。特に日本人の時間を守る姿勢、そして何事に対しても一生懸命頑張る姿には感銘を受けました。日本の道路や街並みは本当に綺麗で、特に人工物と自然が一体となった街づくりにはとても感動しました。

日本で過ごした時間はこれまでの人生で最も冒険に満ちていました。滞在中、最も苦労したことは電車です。駅はとても混雑していて、人々は皆速足で、電車の数も多いので乗るべき電車を見つけるのが大変でした。迷子になることもありましたが、駅構内の案内板のおかげで何とか目的地までたどり着くことができました。

今回参加したプログラムは挑戦の連続で、とても有益でした。たくさん美味しいものを食べ、様々な街を散策し、日本の文化と伝統を体験しました。多くのことを学びましたし、それらを母国の家族、友達と共有していきたいです。日本で経験したすべてのことを一生大切にします。また日本を訪れる機会があったら迷わず来ることを選びます。ありがとうございました。

アイバーソン・アリベン さん
Iverson Aliven

日本での思い出は私の心に一生残るものとなりました。成田空港に降り立ったその瞬間から、私は日本という国が大好きになりました。日本の文化や歴史、斬新なアイデアには、常に興味を惹かれていました。

日本にいる間、たくさんの方々に私たちのことをサポートしていただきました。特に麗澤大学の学生団体「Japanesia」の学生や教職員の方々は、私たちが慣れない環境でも快適に生活できるよう尽力してくださいました。また、APICやテンプル大学、上智大学の職員の方々も、私たちを温かく歓迎してくれました。日本で出会ったすべての皆様に深く感謝いたします。

滞在中、仲間たちとたくさん観光に行きました。横浜と東京を訪れ、インターネットで見たことのある場所を実際に自分の目で見ることができました。その中でも特に横浜で見た「氷川丸」は私にとって特別な意味のあるものでした。氷川丸は、私の故郷であるチューク州に沈む「平安丸」の姉妹船であり、日本と母国のつながりを強く感じました。

プログラム全体を通して私は幸せ、愛、そしてそれ以上のものを感じました。そして日本の生活を経験できたことにより、母国にいる家族・友人に対する感謝の気持ちも深くなり、大切にするべきだと感じました。私の髪が白くなるまで、そして歯が抜け落ちるまで、日本とミクロネシア連邦の協力・友好関係が末永く続くよう願っています。私はまだ18歳なので、とても長い時間であることを期待します。本当にありがとうございました。

AUG
08

リッチ神父招待計画

APIC 主催夕食会にて

2019年8月4日から10日の日程で、ミクロネシア連邦ヤップ州にあるヤップカトリックハイスクール理事長のリチャード・マコーリフ（Richard McAuliff）神父（以下「リッチ神父」）を招待しました。同神父はパラオ共和国、マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦で30年以上活動しており、APICがザビエル高校と上智大学との協定に基づいて受け入れているザビエル留学生の奨学金制度を作った人物でもあります。今回の招待計画では、留学制度を利用して来日した学生との面会や日本におけるイエズス会の高校への訪問をしました。

プログラム初日の午前中にAPIC事務所で佐藤昭治常務理事と面会し、APICの事業や今後の連携について話し合いました。同神父は、佐藤常務理事がミクロネシア連邦で日本国大使に就任していた際にザビエル高校の理事長をしていた関係で、共通の話題も多く、当時の話に花を咲かせながら和やかに話が進みました。中心となった話題としては、APICのミクロネシア地域への支援や若い世代の交流などの可能性、ザビエル高校から上智大学へ入学する留学生のフォローアップなどがあり、一貫して今後も両国の関係を強化することを確認しました。

午後に都内観光をした後、APICの佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会が開かれ、親交のあるイエズス会日本管区長のレンゾ・デ・ルカ神父やイエズス会の越智直樹神学生、以前よりザビエル高校留学生奨学金制度に多大な支援をしてくださっている坂本光彦氏と律子夫人、ザビエル高校で日本語を教えていた石原晴次先生、本留学制度を利用して上智大学で勉強に励む学生たちが参加しました。ザビエル高校からの留学生の教育支援に携わる関係者が集まり、同神父訪日の歓迎とともに、夕食会を通してこれまでの支援に対する取り組みを確認することができました。

坂本ご夫妻と会談中の様子

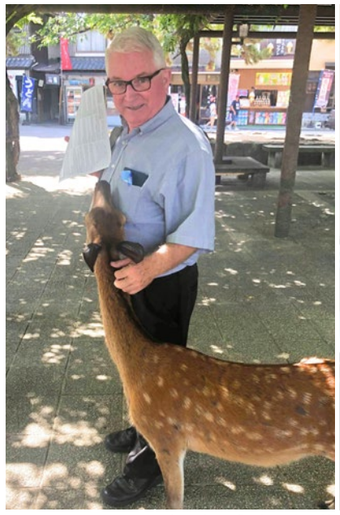
7日にはザビエル留学生とランチミーティングの機会を持ちました。留学生たちは大学での勉強や日本での生活を様子を報告していました。リッチ神父からは学生に対する「宿題」として人生において自分が本当に何をしたいのかを深く考えること、また、自己のアイデンティティの中で自文化と信仰のどちらかが中心に来るのかを考えることを伝えていました。リッチ神父はかつての教え子が大学生になり、東京で生活している姿を見て、ミクロネシア地域の学生の成長を感じたようでした。

上：佐久間理事長（左から２番目）と曄道学長（右から２番目）を表敬訪問
下：ザビエル留学生とランチミーティングの様子

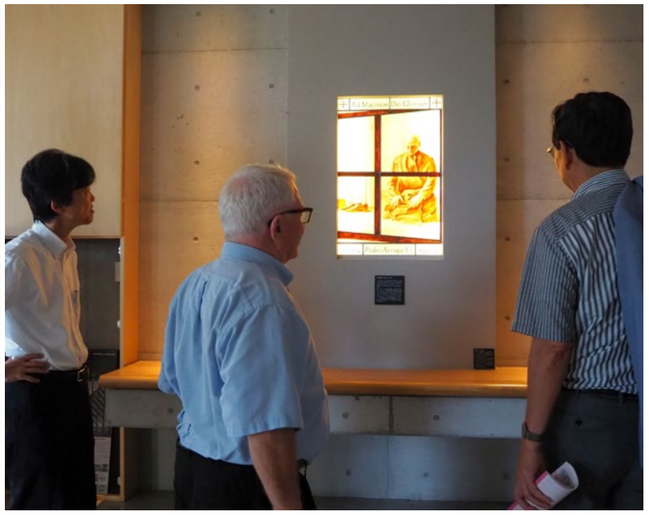
ランチミーティング後には上智大学へと移り、佐藤常務理事も加わって、学校法人上智学院 佐久間勤理事長と上智大学曄道明佳学長を表敬訪問しました。リッチ神父からは留学生の受け入れに関する感謝の言葉があり、佐久間理事長と曄道学長からミクロネシア地域に関する質問がなされました。

８日には広島に移動し、日本に４校あるイエズス会系の高校の一つである広島学院中学校・高等学校を訪問しました。三好彰校長からあたたかな出迎えを受け、広島学院の戦後のあゆみに関する話を聞きました。広島学院は終戦後、町の復興がある程度整った後に、次の段階として子どもたちへの教育に力を入れるためにイエズス会の支援を受けて設立された学校です。しかし、近年はキリスト教徒の生徒や先生なども少なくなり、そのような中でどのようにイエズス会教育を行うかが課題だということです。リッチ神父は自身が理事長を務めるヤップカトリックハイスクールでのお祈りの取り組みや大切にしている価値観などについて言及し、それぞれが教育の中で勉強だけではなく、豊かな人格を備えた人間を育てる教育について情報共有をしていました。

プログラムの中では意見交換をする機会とともに、観光や日本の歴史を学ぶ機会も取り入れ、東京での滞在時には鎌倉へ足を延ばし、お寺と神社の違いや鎌倉時代の歴史について触れました。広島に移動してからは、世界遺産である原爆ドームと宮島の２か所を訪れ、原爆資料館では先の戦争と平和について思いを馳せ、宮島では海に面した神社や野生の鹿、自然に触れることができました。（文責：喜多）



鹿と触れ合うリッチ神父



広島学院の聖堂にて

AUG
08

上智大学畔道学長のカリブ諸国訪問に同行

2019年8月18日から28日の日程で、上智大学畔道佳明学長がカリブ諸国を訪問し、上智大学からは三輪義彦学長補佐及び大学院地球環境学研究科あん・まくどなると教授が、また、APICからは荒木恵理事務局長が同行しました。今回の訪問先は、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、バルバドスの3カ国です。

APICは2014年に上智大学と教育連携協定（Memorandum of Understanding：以下、MoU）を締結しており、APICの「日・カリブ友好協力事業」の一環として、2015年には上智大学と西インド諸島大学（The University of the West Indies：以下、UWI）の間の学術交流協定（MoU）の締結を支援しました。このMoUの下で、上記のカリブ3カ国においてまくどなると教授を講師として「環境セミナー」を開催してきたところです。今回の訪問の目的は、MoU締結から4年が経ち、また、2018年12月に上智大学でSophia University Island Sustainability Unit（SISU）※1が設立されたこともあり、UWIとの間でより具体的な協力について協議を行うため、畔道学長及びSISUの責任者である、まくどなると教授が各校を訪問することとなり、上記の経緯からAPICの同行を求められたものです。

ACSにて

◆ジャマイカ訪問

ジャマイカでは、山﨑啓正 在ジャマイカ日本国大使を表敬訪問した後に、UWIモナ校にて、リチャード・バーナル副学長（地域本部担当）に面会しました。畔道学長からは、SISUが設立されたことを踏まえ、より具体的な協力内容について協議したいとの説明があり、それに対し、UWI側からは、海洋科学、環境、災害・危機管理、アニメ、スポーツなどの分野について関心が示されました。

その後、イエズス会が運営する4年制の高校であるセント・ジョージズ・カレッジ（St. George's College）を訪問しました。同校の生徒の15％程度が奨学金を得て米国に留学しているとのことです。上智大学の海外指定校は現在26校ほどありますが、カリブ・中南米はまだないとのことで、上智大学としても海外指定校として実現できればということでした。

大使公邸で開催された夕食会では、APICがこれまでに実施した招待計画の参加者の成功例としてミクロネシア連邦の大統領になった人物がいることを紹介すると、山﨑大使からは、ジャマイカではAPICが以前招待したショーナ・ケイ・リチャーズ氏（2017年4月実施の「カリブ諸国若手リーダー招待計画」参加者）も外務省の女性課長として注目されており、彼女もAPICのプログラムで日本に行けたことに感謝しているという紹介がありました。

西インド諸島大学
University of the West Indies

西インド諸島の17の国と地域で英語による高等教育を行う大学。3つのメインキャンパス（ジャマイカのモナ校、トリニダード・トバゴのセント・オーガスティン校、バルバドスのケイブヒル校）の他、通信制のオープンキャンパスが各地にあり、英語を公用語とするカリブ諸国における最古にして最大の高等教育機関として、様々な分野に人材を輩出している。

※1　2018年10月設立。あん・まくどなると教授をリーダーとし、上智大学を拠点とした研究や教育活動によって島国の発展や問題解決に取り組む組織。

コープランド学長（奥中央）との面会

バーナル副学長（右列奥から2番目）との面会

◆トリニダード・トバゴ訪問

トリニダード・トバゴでは、平山達夫 在トリニダード・トバゴ日本国大使を表敬訪問し、UWIモナ校での議論の内容や今後の流れについて荒木事務局長より説明しました。

UWIセント・オーガスティン校ではブライアン・コープランド学長に面会しました。畔道学長から訪問の目的について説明があり、荒木事務局長からAPICの活動の概要や、昨年同校で開催した環境セミナー、毎年1月に実施している「太平洋・カリブ学生招待計画」でこれまで訪日した学生のうち、ジャマイカ、バルバドス、トリニダード・トバゴの学生がそれぞれ1名ずつ現在、日本の大学院に留学していること、本年8月にトリニダード・トバゴの学生1名がJETプログラム※2で来日して現在、熊本県の学校で英語を教えていることなどについて説明しました。コープランド学長からは、自分自身が「西インド諸島大学センター・オーガスティン校学長招待計画」（2017年実施）で日本に招待されたことについて言及がありました。

まくどなると教授のSISUの説明には、各学部長も関心を持って聞いており、どのように協力していくのかについて多くのコメントがありました。また、カウンターパートとなるであろう環境研究所のジョン・アガード所長からは、島の持続可能性に関してはUWIも同様の考え方をしており、今後研究を行っていく予定なので是非協力したいという発言がありました。

同国では、UWIのほかに、海洋研究所（Institute of Marine Affairs：以下、IMA）とAssociation of Caribbean States（ACS）を訪問しました。IMAは、海岸の侵食やパラオの珊瑚礁センターのような活動のほか、トリニダード・トバゴのみならず、カリブ海に面している諸国を対象にしているため、上智大学としては是非SISUとの協力関係を深めたいということです。ACSは、カリブ海の25カ国のメンバー国と12カ国の準メンバー国・地域で構成される国際機関で、日本はオブザーバー国として登録されています。事務局長のジューン・スーマー博士も、上智大学との連携に賛同しました。

◆バルバドス訪問

バルバドスでは、品田光彦 在バルバドス日本国大使を表敬訪問しました。その後、まくどなると教授がCentre for Resource Management and Environment Studies（CERMES）の所長を訪問してSISUの説明をし、CERMESの所長も協力に賛同しました。翌週にUWIケイブヒル校バイオレット・バリトー学長との面会で報告する予定でしたが、当時発生していたハリケーンの影響で面会は残念ながら中止となりました。

今回の訪問は、各校、各機関で具体的な連携事業について合意が得られ、有意義なものとなりました。大学を文字通りグローバルにするためには、海外の大学とも提携し、教員や学生も国際化することが大事だという発見がありました。今般のUWI等との連携はその土台作りとなることが期待されます。（文責：荒木）

※2　語学指導等を行う外国青年招致事業（The Japan Exchange and Teaching Programme）の略で、外国青年を招致して地方自治体等で任用し、外国語教育の充実と地域の国際交流の推進を図る事業。（JETプログラム公式サイトより引用）

JUL 07

カリブ諸国リーダー招待計画

カリコム海上保安関係者招待計画

２０１９年7月7日から13日にかけて、トリニダード・トバゴ及びバルバドスから計3名の海上保安関係者を招待し、国交省の協力を得て海上保安能力強化のための研修を実施しました。カリコム諸国※では近年、治安の悪化が顕著であり、特にトリニダード・トバゴではベネズエラからの不法移民が急増しており、大きな社会問題となっています。これらの状況に鑑み、本招待計画では、日本での海上保安の研修と現場の視察を行ってもらうことを目的として招待しました。今回の招待者は、バルバドスのマイケル・リロイ・ジョーンズ（Michael Leroy Jones）中佐（IMPACS（カリコム治安部門）事務局長代理）、トリニダード・トバゴのアゼーム・アリ（Azeem Ali）港湾保安監督官およびトリニオ・クリスチャン・トレイシー（Torinio Kristien Tracey）沿岸警備隊少佐です。

国会議事堂前にて。左から：アリ港湾保安監督官、トレイシー沿岸警備隊少佐、ジョーンズ中佐

◆APICブリーフィング・佐藤理事長主催夕食会

来日後、荒木恵APIC理事・事務局長による日程のブリーフィングと、APICのカリブ諸国への取り組みや今回のプログラムについての説明を行いました。夜には、佐藤理事長主催の歓迎夕食会を東京倶楽部にて開催しました。招待者をアリコック駐ジャマイカ大使や岡田光彦 前駐トリニダード・トバゴ日本国大使、外務省関係者、国交省、中曽根平和研究所の方々とともに歓迎しました。

◆東京観光

都内では、浅草と東京スカイツリーを見学しました。仲見世では、着物や扇子などを購入し、昼食には天ぷらを食べるなどして日本文化にも触れてもらいました。

◆中曽根平和研究所ブリーフィング

同研究所の海洋安全保障研究委員会が「海上における危機管理」という東アジアの海洋安全保障について提言を行っていることから、同提言の内容についての説明を受けました。また、海上自衛隊と海上保安庁との関係やカリコム諸国海軍、海上法執行機関の若手士官に対する能力構築支援等の交流などについて、質疑応答と率直な意見交換が行われました。

上：国土交通省 山本大志氏表敬訪問の様子
下：国土交通省での講義の様子

◆国土交通省・海上保安庁プログラム

国土交通省では山本大志港湾局産業港湾課国際企画室長を訪問し、担当官から講義を受けました。日本の港湾制度・政策についての講義を受けた後、横浜に移動しました。横浜では晴天の下、大桟橋ターミナルなどの港湾施設の視察を行い、専門官による詳細な案内の後、活発に質疑を行いました。横浜税関では、水際における税関の役割について学びました。また、海上保安庁で港湾の取締りや安全についての研修を受け、実際のオペレーションの様子も目の当たりにすることができ、有意義な時間となった様子でした。

◆京都観光

日程の最後には京都を訪問し、金閣寺、二条城などを訪れ、日本の歴史的な建築を見学しました。嵯峨野では竹林散策を楽しみ、清水寺に通じる坂では、八坂の塔の美しい写真をカメラに収めていました。祇園祭を間近に控えており、山車の一部も見ることができ、日本の歴史文化にも触れる貴重な時間となりました。

今回の訪日に関し3名は「大変よく練られたプログラムで、自分たちの希望が期待以上に叶えられた。招待してくださったAPIC、国交省及び海上保安庁の関係者には深く感謝する。」と述べていました。（文責：斉藤）

滞在中の主なスケジュール

7/7（日）	来日
7/8（月）	APIC ブリーフィング 都内観光 中曽根平和研究所ブリーフィング APIC 主催歓迎夕食会
7/9（火）	国土交通省 訪問
7/10（水）	国土交通省施設 視察
7/11（木）	海上保安庁 訪問 京都へ移動
7/12（金）	京都観光
7/13（土）	離日

横浜のコンテナターミナルにて

浅草にて

APIC 主催夕食会にて

※カリコム（CARICOM）とは、CARIbbean COMmunity（カリブ共同体）の略。中央アメリカ州・西インド諸島のカリブ諸国及び領土のモントセラト、南アメリカのガイアナ、スリナム及び中央アメリカのベリーズなどを含めた 14 ヶ国と 1 地域で結成されたカリブ海地域の経済統合、外交政策の調整などを目的とする機関。

SEP 09

カリブ諸国リーダー招待計画

バルバドス創造的経済・文化・スポーツ大臣招待計画

2019年9月29日から10月5日にかけて、バルバドスのジョン・キング創造的経済・文化・スポーツ大臣（The Honorable John Andrew King, M.P.）とシェロン・ドレイトン同省副次官（Ms. Sharon Suzanne Drayton）を招待しました。

今回の訪日では、大臣が所管する文化・スポーツ及び産業育成に関する意見交換を中心に行ったほか、バルバドスのオリンピック・ホストタウンとなっている山形県南陽市を訪問しました。

左から：APIC 荒木理事・事務局長、キング創造的経済・文化・スポーツ大臣、橋本東京オリンピック・パラリンピック担当大臣、ドレイトン副次官

◆都内日程①

両氏は初日にAPIC事務所を訪問し、佐藤昭治常務理事、荒木恵理事・事務局長からブリーフィングを受け、APICのカリブ諸国への取り組みと今回の行程について理解を深めました。その後、スポーツ庁を訪問し瀧本寛次長と会談し、スポーツの普及、資金・インフラ整備、高齢者のスポーツ、スポーツ政策、学校で学ぶスポーツ体系など多岐にわたり意見交換を行いました。橋本聖子オリパラ担当大臣とは暑さ対策、リンピック担当大臣との会談では南陽市がホストタウンとなっていることと、日本としては暑さ対策、言語、輸送など、万全の態勢で臨むことなどについて説明があり、キング大臣からはアスリート育成プログラムなどについて質問をするなど、活発な意見交換が行われました。その後、尾身朝子外務大臣政務官を訪問し、JETプログラムや青少年の交流などについて意見交換をしました。

二日目には、文化庁を訪れ、宮田亮平文化庁長官と会談しました。長官は金属工芸家で、キング大臣は歌手という共に芸術家であり、共通の話題も多く、若手芸術家や学生の交流事業についても活発な意見交換が行われました。その後、日本オリンピックミュージアム、東京国立近代美術館を訪れました。

滞在中の主なスケジュール

9/29（日）	来日
9/30（月）	APIC ブリーフィング スポーツ庁 訪問 橋本聖子オリパラ担当大臣と面会 尾身朝子外務大臣政務官と面会
10/1（火）	宮田亮平文化庁長官と面会 日本オリンピックミュージアム 視察 東京国立近代美術館 視察
10/2（水）	山形県南陽市 視察
10/3（木）	デジタルハリウッド大学 訪問 高橋光輝教授と面会 中小企業基盤整備機構 訪問 APIC 主催歓迎夕食会
10/4（金）	京都観光
10/5（土）	京都観光 離日

◆南陽市訪問

今回の行程では、三日目にバルバドスのオリンピック・ホストタウンである南陽市を訪問しました。市役所では多くの職員が玄関で出迎えて、大臣の訪問を歓迎しました。午前中にバルバドスの選手が使用する体育館の施設を見学し、午後に白岩孝夫市長を訪問しました。同市長は2019年8月はじめにバルバドスを訪問しており、オリンピック後も交流を続けていくことの重要性に触れられるとともに、来年には南陽市から少年たちを連れて再訪したいという発言がありました。その後、隣接の文化会館で開催された南陽市小学校合同音楽会に出席し、主賓挨拶の際に壇上で市長から同市を訪れた初めての外国の大臣として紹介され、大臣がおもてなしに対するお礼として、バルバドスに昔からある民謡の"Beautiful Barbados"を歌ったところ、会場は拍手喝采に包まれました。

上：瀧本スポーツ庁次長（左端）との面会
下：デジタルハリウッド大学高橋教授（右から２番目）との面会

◆都内日程②

四日目には、デジタルハリウッド大学の高橋光輝教授（デジタルコミュニケーション学部 学部長）を訪問しました。高橋教授には、一昨年アニメの専門家派遣として、バルバドスを訪問していただきましたが、同教授からアニメ産業に関してブリーフィングを受け、産業育成など長時間にわたって意見交換を活発に行いました。その中で、キング大臣から高橋教授にぜひバルバドスに来て、若者を指導してほしいとの依頼もありました。その後、中小企業基盤整備機構を訪れ、日本での中小企業育成・インキュベーション制度について説明を受けました。大臣と副次官は京都の街並みを見て、伝統的建造物保存への京都市の関りについても関心を示すなど京都観光を楽しみました。

（文責：斉藤）

◆京都観光

最終日に京都を観光し、嵯峨野、嵐山、金閣寺、龍安寺、錦市場、二条城などを訪れました。金閣寺ではバルバドスのとは異なる日本の竹を興味深く観察し、散策を楽しみ、竹細工店で茶筅と竹製のお箸をお土産に購入しました。また、老舗の一保堂を訪れ、抹茶を購入しました。大臣と副次官は京都の街並みを見て、伝統的建造物保存への京都市の関りについても関心を示すなど京都観光を楽しみました。

◆ＡＰＩＣによる歓迎夕食会

10月3日の夕方には、APIC佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会を東京倶楽部にて開催しました。アリコック駐日ジャマイカ大使、品田光彦 駐バルバドス日本国大使、吉田朋之 外務省中南米局長などのほか、今回の日程の各訪問先からも多数の出席があり、日・バルバドス関係において活発に意見を交わし、盛会となりました。

上：南陽市白岩市長 訪問
下：南陽市の文化会館にて

NOV 11

カリブ諸国リーダー招待計画

ジャマイカ外務・貿易省二国間関係局次長招待計画

2019年11月17日から23日にかけて、ジャマイカのカート・デイビス（Kurt Oliver Davis）外務・貿易省二国間関係局次長を招待しました。今回の訪日においては、主に震災復興の取り組みや、防災対策などについて関心があるということで福島訪問を中心にプログラムを組みました。

福島県農業総合センターにて。デイビス次長（右から３番目）

◆都内ブリーフィング＆視察（APIC・外務省・復興庁・そなエリア東京）

初日にAPIC新事務所を訪問し、佐藤昭治常務理事、荒木恵理事・事務局長からAPICのカリブ諸国への取り組みと今回の行程についてブリーフィングを受け、APICの活動についての理解を深めました。

その後、外務省を訪問し、各部局からブリーフィングを受けました。ブリーフィングでは日本の対カリブ政策、SDGsへの取り組み、カリブ地域への国際協力の取り組みなどについて理解を深めました。デイビス次長は意見交換をする中で「日本の人々による生活に直結する支援プログラムに感謝している。JOCV※が特に機能しており、現地でも高く評価され受け入れられている。政治エリートだけでなく、草の根レベルで広がっており、目的別の小さなプロジェクトが積み重なっていくことが重要だと思う。」と述べました。

復興庁では、組織（時限立法でできている組織であること）、被災状況（過去の災害と比較しても津波での死亡者の割合が高いこと）、復興の進捗状況（原発関連を除いて復興は進んでいること、放射能レベルは減少していること）について話がありました。五輪関係では、福島や宮城が開催地となっている競技もあることについて説明がありました。デイビス次長は住居を失った方々の支援、住民の移動規制などに関する質問やハイチ大地震やジャマイカの過去の大地震との比較についての言及など活発に意見交換を行いました。

また、防災体験学習施設「そなエリア東京」では、タブレット端末を片手に、地震に遭遇した状況の疑似体験をしました。

復興庁にて

※青年海外協力隊（Japan Overseas Cooperation Volunteers）の略。ODA（政府開発援助）の一環として、JICAが実施するボランティア派遣制度。

カリブ事業

滞在中の主なスケジュール

11/17（日）	来日
11/18（月）	APIC ブリーフィング 浅草観光 そなエリア東京 訪問 歌舞伎鑑賞
11/19（火）	外務省ブリーフィング 江戸東京博物館 視察 上智大学大学院生との意見交換会
11/20（水）	JICA 訪問 外務省ブリーフィング 駐日ジャマイカ大使館 訪問
11/21（木）	福島県へ移動 農産物直売所「愛情館」、福島県農業総合センター、ABE 果樹園 視察 福島県庁、危機管理センター 訪問
11/22（金）	日光観光
11/23（土・祝）	離日

上：上智大学大学院生との意見交換会
下：ABE 果樹園でりんごを収穫

◆上智大学訪問

上智大学では、大学院で学ぶ現役の学生（地球環境学研究科あん・まくどなるど研究室在籍）と意見交換会を行いました。まくどなるど教授及び10名の学生と、ジャマイカや島嶼国というキーワードを踏まえ、ジャマイカにおける経済開発と自然保護のバランスや、島嶼国が国としてSDGs達成のために動くとき、政治面ではどのような動きがあるのかなど、質問が多く寄せられ、活発に意見交換が行われました。

その後は上智大学構内にてキャンパスツアーを行いました。6号館1階では、ローマ教皇来日記念の企画展が開催されており、展示されていた写真に興味深く見入っていました。

◆都内観光（浅草・歌舞伎）

都内ではブリーフィングのほか、観光も行いました。浅草観光、歌舞伎鑑賞など日本の伝統文化にも触れ、初めての訪日を楽しみました。

◆福島訪問（郡山市・福島市）・日光観光

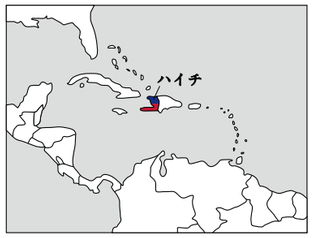
福島では、最初に郡山市の農産物直売所「愛情館」を訪れ、実際に現地で採れた食材が売られているところを視察しました。日本ならではの野菜や果物などを試食しながら楽しみました。次に、農業に関する技術研究や人材育成を行っている福島県農業総合センター（郡山市）を訪問し、放射線量のモニタリングチェックの様子などを実際に見ながら、県庁の農林水産部の方から説明を受けました。デイビス次長は人材採用や組織の継続性などについて積極的に質問をしました。その後、りんごを栽培しているABE果樹園（福島市）を訪問し、収穫期だったこともあり、実際に自分でりんご収穫して食べる体験をしました。「農業総合センターを見学しても思ったが、日本では農業に関係してこれだけ素晴らしい仕事が行われていると知り、とても感動した。」と感想を述べていました。最後に福島県庁を訪れ、危機管理センターを訪問し、災害が起きた際に使用されるモニターつきの会議室や仮眠室などを見学しながらブリーフィングを受け、災害対応について学びました。

最終日には、日光東照宮を訪問し、日本の歴史文化だけでなく、五重塔の建築技法が東京スカイツリーにも応用されていることなども学びながら日本の技術水準の高さについて理解を深めました。

◆APICによる歓迎夕食会

11月22日の夕には、APIC佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会を東京倶楽部にて開催しました。アリコック駐日ジャマイカ大使、高瀬康夫 元駐ジャマイカ日本国大使、外務省、復興庁関係者のほか、APICが過去に実施した招待計画がきっかけとなり、現在、日本の大学院で学んでいる留学生なども出席し、親交を深めました。

（文責：斉藤）



第４回「ハイチ便り」

ハイチの最近の政治情勢

～ハイチの政治：新政権発足１年を経て、現政権下の現状と政治的課題について～

寄稿：在ハイチ日本国大使（当時）　八田　善明

APIC ウェブサイトでは、八田善明 在ハイチ日本国大使（当時）寄稿の連続コラム「ハイチ便り」を配信しております。日本で知られることの少ないハイチ共和国の政治、社会、文化などについての情報を発信し、日・ハイチ関係の増進を目指します。本ページでは、第４回「ハイチ便り」の内容を掲載しています（2018 年時点での執筆記事）。その他の「ハイチ便り」については、APIC ウェブサイト（http://www.apic.or.jp/projects/haiti000.html）をご覧ください。

2018年2月7日で現ジョヴネル・モイーズ大統領就任から満1年となりました。5年任期、続けての再任不可と規定されている中、5分の1の期間が過ぎたことになります。その間、モイーズ大統領は、就任直後から首相を指名・任命し、新内閣が立ち上がり、大統領自らが優先課題として位置づける農業分野の大規模化と近代化に向けた「変革のキャラバン（Caravan de Changement）」といった施策に乗り出しました。1年たった今、若干の内閣改造を経て現在に至っています。

このように数行で表すと、同プロセスは当たり前で、いとも簡単そうに見えなくもないですが、モイーズ政権はハイチでは通常においてかなり大変なプロセスを比較的早めに大過なく通過したと評価されます。

過去から脈々と続くハイチにおける政治的・行政的な優先課題は、見れば見るほど「政治的安定」と「治安の確保」に尽きます。また、国の発展の前提としては「社会的・経済的な安定」も重要であり、こちらも政治的安定や治安に直結していますが、政治的な安定がなければこれらの改善や発展もままならないことから、ややニワトリと卵的な関係にもありますが、いずれもハイチの安定と発展上の両輪と言えます。

以前のコラムでは主に社会面等を御紹介してきましたが、今回は国の経営の骨格と言える政治面に焦点を当て、以下にハイチが抱える政治体制・特徴や政治的な課題の概略を見ていきたいと思います。

■政治体制

国の名前からも明らかなとおり、現憲法下においてハイチは、大統領を国家元首とする立憲共和制を採用し、大統領は5年の任期で、連続しての再任は不可とされています。首相は、大統領の指名に基づきますが、議会を前に、同施政方針演説につき上下院による承認を経てきています（施政方針だけでなく内閣のメンバーの承認も対象となっています）。また、2院制の国民議会において、上院は30人の上院議員からなり、6年任期で3分の1ずつ2年毎に改選され、下院は4年の任期で119人の下院議員からなります。このほかに破棄院を頂点とする司法があり、三権分立の体制をとっています。なお、ハイチではそれぞれの体制と機能の維持の面において色々と課題が多く、安定的運営の観点から一筋縄ではいかないことが多いです。

代表的な課題は、一つは後段で取り上げる「選挙」の問題であり、大統領という意味において行政府、上下議員という意味で立法府がいずれも多大な影響を受けます。もう一つは首相の任命にあたっての議会承認（信任）のあり方でしょう。また司法関係者の任命についてもやはり滞ることがあり、三権が全て全面的に機能することは容易なことではありません。

モイーズ大統領就任式　於国民議会

前段で触れた首相の任命については、形式的に議会の承認ということであれば手続き的には簡単なのですが、ハイチではかなり重く、ややこしいプロセスとなっています。行政府として大統領が同チームを編成するにあたり、議会というよりは個々の議員がそれぞれに様々な条件を出し、折り合いがつかなければ首相への承認票が得られないという慣習になっており、幾重にもなる条件闘争へのネゴシエーションが首相を任命してから議会での承認投票までの間に待っています。最近では、前マルテリー大統領による首相指名の際にも、プリヴェール暫定大統領時代にも首相指名は1回では議会承認が通らず、別の候補を指名しなおすというプロセスを経ています。それ故、従来の例では、2月7日の大統領就任から内閣組閣までの期間は数か月もかかることも珍しくはありませんでした。その意味で、今般のモイーズ政権におけるジャック・ギー・ラフォンタン首相の承認が一人目かつ比較的短期間に得られ、発足した（大統領就任から47日）ことは、ある意味画期的でした。これは、2012年の憲法改正によるところがあり、かつ政権与党であるPHTKと同盟関係にある政党が議会において一定のプレゼンスを確保していることから可能となったことであり、引き続き同傾向が維持されれば、一層の政治的安定に資することが想定されます。

このように、あらゆるところに政治的な駆け引きを要するのがハイチにおける政治の現状です。その中には腐敗の温床や腐敗そのものに直結しかねない要素もあることから、これまでの政権でも言われてきてはいますが、現モイーズ政権下においても厳格に腐敗撲滅を進めるとしてきています。

■法体系

ハイチの法体系は、ハイチのフランス植民地からの独立等の歴史的経緯もあり、今から200年以上も前の独立前後の動き等、それらの様々な影響について遡ってみる必要があります。逆に言えば、植民地であったということは独立までは独自の法の整備がなかったということでもあり、かつ世界的にみても近代法の黎明期に法整備を行う必要があったという意味において、色々な意味でチャレンジングであったと思われます。特に時代として、「人権」や「平等」の意味（や対象）が必ずしも現代のそれとは同じでない中において建国と法整備を行ったことからも、その後の法体系と実施体制において多くの課題を内包したものとなったと見受けられます。

憲法は、独立前の1801年のルーヴェルチュール憲法が一つの新しい基準、すなわち奴隷や有色人種の自由と権利の確保を目指したものとして、いわゆる「ハイチ革命」の要素として注目されます。また、独立後も、そのときの為政者により修正を行ってきており、社会の発展と共に必要なものを合わせたとしても23回を数えますが、中でも1987年憲法がそれまでのデュバリエ父子独裁政権時代の頸木への決別の象徴となる国民投票による共和憲法として重要な位置づけになるでしょう。その後の修正は、直近の2012年にマルテリー大統領の下で実施された（1987年憲法では大統領の指名した首相候補は議会の承認を要するとしていた部分の廃止等（137条））のを最後に、今も新しい憲法に向けての委員会が設置されている等、次なる変化に向けて動いています。

民法についても、時代を反映して1804年のナポレオン法典の多大な影響を受けているとされますが、一方でハイチ独自のものへと修正をしながら導入されてきました。

法体系との関係においては、近代国家の基本である「法の支配」、司法体制の確立そして治安や警察体制など多くの要素と密接に関係していますが、長い歴史の中で政治的不安定等に起因して体制の確立が未だ不足している面、ルールの遵守よりも自己防衛が先に立つ環境で身についたメンタリティ等克服すべき課題は少なくありません。

このほか、ハイチでは、長引く議会の機能不全等もあり、国内法の整備・近代化、そして国際社会において採択・署名された各種協定についての批准作業（議会承認）等が大きく滞っていることなども問題になっています。これらについても新政権下において、遅れを取り戻すべく順次作業が行われています。

■選挙

ハイチでは、通常の場合において「選挙」は鬼門です。選挙における対抗陣営同士の競争が、人々の対立を作り、煽り、衝突し、破壊と社会的分断をもたらすことが多いからです。これは、ある意味より本能的・本質的に政治的な人々だから

街中の選挙キャンペーンポスター（モイーズ大統領候補）

かも知れませんし、生活から野心まで色々な思惑がかかっている位政治というシステムにのめり込んでいるのかも知れません。支持者は、その後の利益を見据えて必死で応援するため、絶対に負けられない、負けたら終わりといった様相の陣営が本気であらゆる手を尽くそうとするため、どこまでが不正なのかも解らないこともありそうです。当然、選挙の開票結果をそのまま一回で納得することもまずありません。劣勢になった方は、必ず優勢の方が不正をしたと唱え、やり直しを主張します。

これまでの選挙においてもこうした不正・やり直しの主張は幾度となく繰り返され、2015年の大統領選挙第一回投票では欧州連合（EU）と米州機構（OAS）およびその他の選挙監視もあり、調査の上で不正は無かったとされたにも関わらず、敗北が濃厚となった野党が連合を組み、選挙の無効を唱え、大規模なデモにも発展し、その後の治安との関係に配慮したとしてやり直しまで持ち込んだケースもありました。2016年の再選挙でも同様に不満は唱えられましたが、得票一位となったジョヴネル・モイーズ候補が勝利し、なんとか就任までこぎ着けました。

また、上院議員の選挙に至っては、何度も開催されずに推移したため、期限どおりに3分の1ずつの改選がなされずにとうとう議決に必要な定数割れになり議会が機能停止する等の事態に陥ったこともあります。

選挙公報パネル「みんなで投票しよう」

このように選挙の実施自体にも課題があり、かつ実施したとしてもその結果が素直に受け入れられないことがあるという極めて政治体制上厳しい環境が継続してきました。目下これを如何に安定的に実施するのかといった視点からの議論がなされており、臨時選挙管理委員会（CEP）から常設選挙管理委員会へと移行するべく検討が進められ、選挙のあり方についても今後の検討課題とされています。

これ以外にも選挙といった膨大なロジスティクス運営の困難な問題も無視できません。費用の問題もその上にのしかかります。先ず、全国規模で選挙、投票を実施するための準備、関係者のトレーニングを行う人へのトレーニング、実際の投票・集計用紙の配布・回収作業等を始め、業務量は計り知れません。山岳部や沿岸部等、投票所への道がなかったり、また平坦とは限らないハイチにおいて、ほぼ同時に投票用紙を配布し、選挙実施妨害に遭わないように警備を付けて管理し、強奪・焼却されないように速やかに回収・集計することには多くの人員と労力を要します。

前回の大統領選挙では、国連開発計画（UNDP）が臨時選挙管理委員会（CEP）を支援し、多くの技術的な支援やトレーニング等を行ったほか、国連ハイチ安定化ミッション（MINUSTAH）等のバックアップにより警護と投票用紙等の配布・回収等の運搬機能が担保され、この膨大な選挙という一行事を無事に終了することができたと見られます。このように、誰がやっても不正の根拠にされかねない趣の中、中立的に作業を行うことを確保すること自体が一つの気遣いということになります。

なお、名誉のために言えば、選挙監視人（オブザーバー）の目で複数の投票所を直接見たところでは、極めて厳格に丁寧に行われており、不正を感じさせるものではありませんでした。また、透明性を確保するために各政党から投票所に政党代理人（マンダテール）を置くことができる仕組みとなっており、開票作業に当たる者は、記入済み投票用紙を一枚一枚、表面の写真入り記入か所のどこに「×」がついているか、そして裏面には投票所責任者・副責任者の署名が入っているかをマンダテールに見せながら集計作業を行い、一つ一つカウントし、最後に数字を書き込む等、誠意を持って作業に当たっていることを確認しました。一部の投票所で不正があったり、未熟な記載ミス等は起こり得るのでしょうけれども、正しく実施していることも一方で事実であり、全体として管理能力は高まっていると言えます。今後、より合理的な選挙の実施と運営に向けての各種調整に期待が寄せられます。

■治安と政治的安定

ハイチでは、政治的安定と並び「治安の確保」も重要な要素となっています。それらはそれぞれに重要な要素なだけでなく、密接に関係している面もあるからなおさらです。

投票箱（大統領 / 上院議員）

ともすれば選挙や与野党間闘争における示威行為（デモ）が興奮状態となり暴徒化することが起こり、特に社会経済上の不満を有する市民を煽って動員する等社会の不安定を助長しています。

また、長い年月の間に生産手段を失った農民を始め、都市部には複数のスラム街が形成されており、犯罪組織の巣窟となり、警察すらも恐れるギャング団を形成しています。

彼ら同士での権力・縄張り争いでの銃撃戦にはじまり、スラムから周辺地域に進出しての強盗その他の犯罪活動を行い、さらには邪魔者を消すような暗殺行為も行われています。

政治的に無縁でもないこの治安の問題は、その前にも例がありますが、2004年にも国連 PKO の派遣を要する状況となり、以降2017年までの13年間に渡り国連ハイチ安定化ミッション（MINUSTAH）が派遣され、長い年月にわたり治安維持及びハイチ国家警察（PNH）の増強プログラムを支援してきました。その後、一定の効果が得られたとして2017年10月に同ミッションを終了し、やや任務を変えた国連ハイチ司法支援ミッション（MINUJUSTH）への派遣につながりました。なお、MINUSTAH は、先に述べた選挙といったハイチにおける混乱要因を安定的に実施する上でも国連開発計画（UNDP）ほかと密接に連携してこれらの実施をバックアップして来ました。

MINUSTAH と MINUJUSTH の大きな違いは、治安関係で対処する能力としての国連の軍部門の有無でしょう。すなわち、暴動等について警察力でコントロール可能か否かの水準に関し、軍の兵士がバックアップするかどうかの必要性の有無が一つのメルクマールであり、現状では、警察力によってほぼ管理が可能という風に理解することができるということになります。

スラムにおけるギャング対策、市内のパトロール等による治安確保、そして大きな課題となっている留置場や刑務所等の司法面でのインフラ・組織両面での改善、司法・裁判手続きの改善等、社会面、経済面での底上げと同時に対処しながら全体としての治安面の改善に向けて努力が払われているところです。

■当面の政治的課題

これまで記述したように、目下のハイチで重要なのは、現政権下において如何に不安定な内政状況を安定的に運用し、現政権自体の維持を確保し、今後予定される選挙を安定的に運用し、野党勢力を含め治安混乱要因を管理していくかということが最優先であると見られます。

また、国家財政の健全化は、国際機関を始めとするドナーからの融資を受ける上で前提となります。これまで補助金で緩和していた燃料（ガソリン等）や電力等の価格についても改善が求められており、如何に社会的不安に直結しないように上手く対処できるかが重要な課題となります。

国民の社会生活確保・基礎インフラの整備も急務になっています。経済活動を刺激し、食料自給を確保し、輸出商品を増やす等多くの課題に積極的に取り組み、ハイチを国内外から住みやすく、ビジネスがしやすく、観光地として成功するべく取り組みを継続しています。

同時に、外交面では、国内努力を支持・支援してもらう意味においても、カリブ海諸国との関係や近隣国である米国・カナダや欧州、フランス等との関係を適正に保ち、移民問題や密輸問題等に対処し、特に隣国ドミニカ共和国との間での国境問題やハイチ人の帰属・帰還問題等に適正に対処していく必要があります。

一方で、国連 PKO を始め、諸外国に頼りすぎない自立性を担保するために、ハイチ国軍の再編を強化し、一方で国際世論にも配慮して、戦闘的な要素ではなく輸送・医療・施設部隊を中心に整備を進めるとしています。

さらには、時として容赦なくハイチを襲う震災や、より頻度の多いハリケーン、そしてそれまでに至らない集中豪雨等による浸水・洪水・浸食（地滑り）等への対処の防災面も避けては通れません。

このように、課題が山積な中、新政権は体制の強化、インフラの整備、国際協力関係の見直し等多くに積極的に取り組んでいます。

（※写真は筆者が撮影）
（※本コラムの内容は、筆者の個人的見解であり、所属する機関の公式見解ではありません。）

太平洋・カリブ記者招待計画 2019

2019年10月にAPICと公益財団法人フォーリン・プレスセンター（FPCJ）の共催で「太平洋・カリブ記者招待計画」が実施されました。本プログラムは今年で5回目を迎え、「環境と防災」をテーマとして、太平洋とカリブ地域のシニアジャーナリストを4名日本へ招待しました。

今年度は10月19日から30日の12日間にわたるプログラムとなりました。今回の参加者はレイラニ・レクライ氏（パラオ）、イレイサ・トラ氏（トンガ）、アンドレ・ヒュイー氏（セントクリストファー・ネイビス）とクリストファー・セルジュ氏（ジャマイカ）の4名です。また、長年にわたりアジア太平洋地域でジャーナリストとして活躍するフロイド・タケウチ氏に加えてドーン・マタス氏、ギフ・ジョンソン氏がプログラムコーディネーターとして記者の取材や記事の作成に対するアドバイスを行いました。

昨年に続き、今回も「ジャーナリズム・インターンシップ」として、国際基督教大学からピーターソン玲奈ニコルさん、上智大学から久保田弘輝さんの2名が参加しました。学生にとっては、プロのジャーナリストがどのように取材をし、記事を書くかを学ぶ機会として、参加記者にとっては日本の若者の考え方に触れる機会として、双方向への効果が期待されます。

ジャーナリストたちは東京都、神奈川県、熊本県熊本市及び益城町、そして沖縄県の久米島を周り、数多くの取材と記事の執筆を行いました。記者たちは、毎日複数の取材に参加し、その日に関心があった題材や事項について記事（本プログラムでは「ストーリー」と呼ぶ）を書きました。各記事は、プログラムコーディネーターの助言を受けて修正され、それぞれ現地の新聞やニュース記事として報道されました。記者たちは特に、熊本県益城町では行政のみならず、被災した住民、支援するNGOなど多くの人々に会って話を聞けたことを喜んでいました。インターン生も同様にいくつかのストーリーを執筆し、また、参加した4名の記者のパーソナル・プロフィール（紹介記事）も書き下ろしました。（文責：ピーターソン）

プログラム修了式にて

参加記者

パラオ

レイラニ・レクライ 氏
Leilani Reklai

「Island Times」紙 発行人・編集長

「Island Times」紙はパラオに2紙ある全国紙の1つ。レクライ氏は、同紙の発行人・編集長であり、共同所有者。また、コミュニティと国政のリーダーでもある。現在はベラウ観光協会の会長を兼務。パラオ通信公社長を7年間、故郷のアイメリク州の知事を8年間務めた。

トンガ

イレイサ・トラ 氏
Iliesa Tora

「Nuku'alofa Times」紙コンサルタント兼編集長

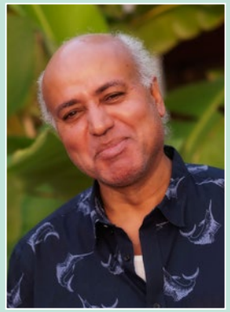
オンライン紙「Nuku'alofa Times」紙の創設者で、現在は同紙のコンサルタント及び編集長を務める。また、トンガ政府・環境省のコミュニケーション担当官も兼務。母国フィジーでジャーナリストとして長いキャリアを有する。Pacific Environment Journalists Networkの創設者兼共同議長。

セントクリストファー・ネイビス

アンドレ・ヒュイー 氏
Andre Huie

「SKN Newsline」ニュースディレクター

Voice of the Caribbean Radio、SKN Newsline、JIFE Music record label共同設立者兼CEO。SKN Newslineは、セントクリストファー・ネイビスに関するニュースと情報を提供するオンラインテレビニュースのプラットフォーム。ジャマイカ出身。



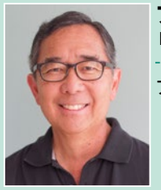
ジャマイカ

クリストファー・セルジュ 氏
Christopher Serju

「The Gleaner」紙 シニア・ジャーナリスト

同紙は、1834年設立の新聞社。週6日発行の日刊紙「The Gleaner」紙及び日曜版などを発行する。セルジュ氏は、農業、環境、および農村開発の専門記者。これまで環境と気候変動に関連する報道で複数の賞を受賞している。30年近いキャリアを持つベテラン記者。

プログラムコーディネーター



フロイド・タケウチ 氏
Floyd Takeuchi

プログラムコーディネーター

デイリーポスト紙(フィジー)編集長、パシフィックマガジン誌発行人、ブルームバーグニュース（テレビ・ラジオ）東京特派員など、約40年にわたりアジア太平洋地域でジャーナリストとして活躍。今回のプログラムではコーディネーター役を務める。

ドーン・マタス 氏
Dawn Matus

プログラム副コーディネーター

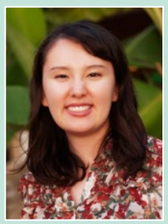
日本で30年近くジャーナリストとしての経験を持つ。日本放送協会（NHK）の英文編集および寄稿者、ブルームバーグ東京支局でアジアの金融市場をカバーするテレビとラジオの特派員として活躍。最近約30年住んだ日本を最近離れ、現在は米国在住。

ギフ・ジョンソン 氏
Giff Johnson

プログラム副コーディネーター

マーシャル諸島の首都マジュロで発行される週刊紙「Marshall Islands Journal」紙の編集長。オセアニア地域で最も尊敬されているジャーナリストの一人。著書多数。

「ジャーナリズム・インターンシップ」参加学生



ピーターソン　玲奈ニコル さん
Rena Nichole Peterson

国際基督教大学大学院
博士前期課程
アーツ・サイエンス 研究科
公共政策・社会研究 専攻
社会文化分析

久保田　弘輝 さん
Koki Kubota

上智大学
文学部
新聞学科 4年

Photos by Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

浅草にて

記者たちが来日した翌日に全体ミーティングが行われ、参加者はお互いの紹介やアイスブレイクをしました。ミーティング後には浅草に行き、日本文化に触れました。

10月21日、記者たちはＦＰＣＪを訪れ、ＡＰＩＣ佐藤嘉恭理事長と荒木恵理事・事務局長とともにプログラムオリエンテーションを行いました。また、翌日に行われる天皇陛下の「即位の礼」に伴い、日本の皇室についての講義が行われ、記者たちは日本の天皇制や皇室に関する知識を深めました。その後は気象庁に行き、日本における災害や防災についても学びました。最後に独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）を訪れ、環境や災害に関する問題や国際協力について取材を行いました。

22日は東京大学、法政大学、首都大学東京の学生たちをＦＰＣＪに招き、記者たちとともに皇室に対する意見や意識を主題にディスカッションが開かれました。残念ながら祝賀御列の儀（パレード）は延期されたため見学することはできませんでしたが、記者たちにとっては日本の学生と意見交換し、日本の文化を知る良い機会となりました。

翌日は横浜市資源循環局を訪れ、日本のごみ処理とリサイクル方法を学びました。鶴見資源化センターの見学も行い、記者たちはごみの分別収集や資源化、地域住民による協力について注目していました。その後は東京スカイツリーを訪れ、スカイツリーの建築技術、防災、エネルギー管理について取材が行われました。（文責：ピーターソン）

24日には熊本県へ移動し、益城町と熊本市を訪問しました。

益城町では、町役場、益城町テクノ仮説団地、災害公営住宅の並ぶ田原第２団地、益城中央小学校、被災者の生活再建を目的に活動される、くまもと友救の会を訪れました。町役場では熊本地震発災時の状況や復興の状況について説明を受けました。益城町テクノ仮説団地、田原第２団地では、住民の方々が今どのような生活を送られているのかということなどを聞きました。

益城中央小学校にて

益城中央小学校では小学校の生徒と一緒に給食を食べ、記者たちは小学生との交流を楽しみました。被災者を支援しているＮＧＯのくまもと友救の会では、活動内容や経緯についての説明のほか、責任を持ち、社会の一人として被災者に関わることが大切だという話がありました。

熊本市では、熊本城の被害・修復の様子を見学した後、熊本日日新聞社において震災時の報道についての説明を受け、熊本まちなみトラストの方々からは歴史的建造物の復旧に向けた活動について話を聞きました。熊本城は完全復興までは20年かかるということで、修復作業が進められていました。

熊本日日新聞社では、災害時に最も必要なのは先を読む力であるという話がありました。熊本まちなみトラストの案内で、実際に修復中の歴史的建造物の中を見学しました。

27日には沖縄県へ移動し、久米島町を訪問しました。

久米島初日の夕食は、町の方々と共に過ごし、記者たちは沖縄料理や三線の演奏と歌を堪能しました。

翌日は、町役場で久米島の資源である「海洋深層水」を利用した発電や、海ぶどうやクルマエビの養殖など海産物の生産に結び付けている事例など、様々な側面から街の活性化につながる「久米島モデル」について説明を受けました。その後、沖縄県海洋深層水研究所、クルマエビ、海ぶどう、牡蠣の生産施設、海洋深層水を用いた化粧品の生産会社を訪問し、街の中での海洋深層水活用の様子を視察しました。最後に、米島酒造で泡盛製造の工程についてレクチャーを受けました。

プログラム最終日は、東京日本橋の茶友倶楽部空門でお茶体験と着付け体験を通して日本の伝統文化に触れました。夕方には修了式とＡＰＩＣ主催の夕食会が開かれ、プログラムを終えました。（文責：久保田）

プログラムを終えて

国際基督教大学大学院 博士前期課程
ピーターソン 玲奈ニコル さん

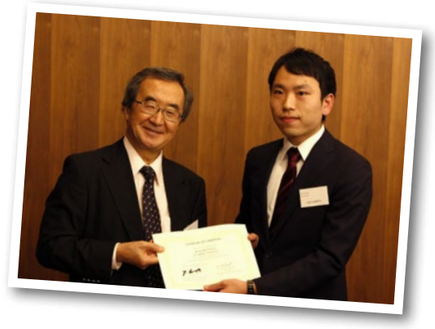
私はこのプログラムに参加する以前はジャーナリズムの経験がなかったため、プログラムで経験した全てのものが強い刺激となりました。また、以前から興味があった「ジャーナリスト」という職に対してより関心を持つようになりました。

このプログラムは記者の仕事、取材方法や記事の書き方をシニアジャーナリストから直接学べる、素晴らしいプログラムです。自分が書いた記事がその日に編集され、「なぜここが編集されたか」「どのようにこの記事を改善できるか」というアドバイスを毎日コーディネーターたちから受け、ジャーナリストとしての様々な視点や姿勢を学ぶことができました。

今回一緒に参加した記者たちのプロフィール作成を担当したことで、記者たちの人生や人格を深く知ることができました。日本に比べて、カリブや太平洋は小さい国々が多く、国によっては一人のジャーナリストが重大な影響力と責任を持っていることを学びました。記者たちと関わる事で、ジャーナリストとしての役目や義務をより深く理解できたと思います。一人の記者が教えてくれた「ジャーナリズムはパワー」という言葉は、とても刺激的でした。今回のプログラムを経て、今後ものを書き、情報を伝えて行きたいと強く感じることができました。

プログラムを終えて

上智大学 文学部４年
久保田 弘輝 さん



ひたむきな眼差しで取材相手の話に聞き入る姿、カメラのシャッターを切る音、止まない熱のこもった質問。そんな真剣な空気感広がる生の取材の現場を、各国で活躍するジャーナリストたちと共にすることができたのは、忘れられない経験です。

働いている国も、これまでのキャリアも全く異なる彼らですが、「目の前の真実を多くの人に自らの手で伝えたい」という想いは共通でした。取材が終わると、ニュースをリポートし、自身で映像編集をしたり、記事の構成について熟考したりする記者を間近に見て、その想いが強く伝わってきました。４年間新聞学を専攻している私にとって、ジャーナリストとはどのような者なのかという「原点」を、肌で学ばせてもらえた思いです。

セントクリストファー・ネービスの記者は、「特に、未来をつくる子どもたちに、自分の発信する情報を見て、様々なことを知ってもらいたい」。また、「そのためには自分の流す情報は正確でなければならない」と話してくれ、情報を伝える中での相手のことを考える姿勢や、責任を教えていただきました。そして、彼のやさしい言葉からは、あらためてジャーナリズムの「人と人の世界」を感じました。

第2期ザビエル留学生&第1期MCT留学生が上智大学・大学院を卒業

2019年9月にミクロネシア連邦から受け入れている学生が3名卒業しました。ザビエル留学生のリサ・オウエ（Risa Oue）さんは上智大学国際教養学部で4年間、ブラッドフォード・モリ（Bradford Mori)さんとバーサ・レイユ(Bertha Reyuw）さんは上智大学大学院地球環境学研究科で2年間勉強に励みました。ブラッドさんとバーサさんはAPICが上智大学とミクロネシア自然保護基金(Micronesia Conservation Trust：以下、MCT）との三者間の協定を結んで以来、初めての卒業生です。今回はザビエル留学生とMCT留学生の合計3名の卒業生を送り出すこととなりました。

卒業式が開催された9月20日はさわやかな秋晴れで、上智大学構内は卒業生やその家族でにぎわっていました。ザビエル留学生とMCT留学生のご家族もミクロネシア連邦から駆け付け、卒業生にヘッドレイや首飾りを渡すなど、あたたかな祝福がありました。

同日の夕方には東京倶楽部でお祝いの夕食会を開催し、上智大学の寮で生活を共にしたミクロネシアからの留学生の他、お世話になった指導教員やソフィア会の方々、奨学金の寄付者などが集まり、学生たちの卒業と新しい門出を祝う時を共にしました。

MCT留学生のブラッドさんとバーサさんはそれぞれ自分の出身の州に住みながら、日本で得た知識を生かせるような団体で仕事をはじめ、ザビエル留学生のリサさんは仕事をしながら、上智大学で専攻していた会計関係のプログラムのある大学院に進学する準備を始めるということです。日本での留学経験を糧にしてもらい、自分の置かれた場所で活躍できるよう、APICはこれからも遠くから見守りたいと思います。（文責：喜多）

第３期 MCT留学生 上智大学大学院に入学

2019年9月21日、第3期MCT留学生として、ミクロネシア連邦のアネット・ルドウィグ（Annette Ludwig）さんとパラオのエルウン・ヒデヨス（Elchung Hideyos）さんが上智大学大学院に入学しました。2名は地球環境学研究科に所属し、2年間の留学生活を送る予定です。

「APIC-MCT留学生奨学制度」は、上智大学・ミクロネシア自然保護基金（MCT）・APICの三者間の合意に基づき、ミクロネシア3カ国から留学生を毎年2名派遣し、上智大学大学院地球環境学研究科で修士号を取得するプログラムです。2017年のプログラム開始以降、現在では4名の学生がそれぞれの研究テーマを持ちながら日々、研究に打ち込んでいます。本年9月には第1期生が卒業しました。

今年度入学の２名の学生による所信表明（APIC和訳）

エルウン・ヒデヨス さん
Elchung Hideyos

私の名前はエルウン・グラディス・ヒデヨス、略して「エル（El）」と言います。23歳で、パラオ共和国出身です。2018年5月にハワイ州ホノルルにあるシャミナード大学を卒業し、環境学の学士号を取得しました。そして2018年の夏、私はパラオにあるエビール・ソサエティー（Ebiil Society, Inc.）というローカルNGOでインターンシップをしました。これは環境保全や教育に関する団体で、子供たちや熱心な地域の参加者たちに、パラオの先住民族の知識を通して、環境保全（問題）について教えることに取り組む組織です。

夏のインターンシップの後、私は環境教育プログラムコーディネーターとして正職員になりました。1年間働いた後、私は幸運にもAPIC-MCT奨学金を得て、上智大学大学院地球環境学研究科の修士課程に進学できることになりました。

私は保全生物学、気候変動、島の持続可能性について興味があります。このプログラムの後、パラオに帰って母国の発展に貢献できるように、大学院課程で出来る限り多くのことを学びたいと強く思っています。私が得た知識を使って、他者の自然保護に対する関心や、より持続可能な生活スタイルへの促進に良い影響を与えたいと考えています。今のところ、大学院での研究は順調です。日本での2年間をとても楽しみにしています！Mesulang（ありがとう）！！

アネット・ルドウィグ さん
Annette Ludwig

Kaselehlie!（こんにちは！）私の名前はアネット・ルドウィグといいます。私の父はミクロネシア連邦ポンペイ州出身で、母はフィリピン出身です。私自身はフィジーで育ち、現在はグアムを拠点に生活しています。

上智大学に通う前は、グアム大学で生物学の学士を取得し卒業しました。大学最後の一年間は、グアム大学の植物標本館で研究助手として働いていました。上智大学大学院地球環境学研究科では、学問分野の垣根を越えて研究に従事し、またどのようにしたらミクロネシア連邦の人々のために貢献できるのかを学びたいです。

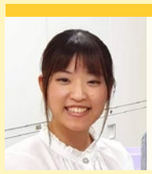
この研究科を選んだ理由は、島国は気候変動の最前線にいるからです。小さな島国は世界の二酸化炭素排出量削減にはほとんど貢献できることはありませんが、自然災害と海面上昇の高いリスクにさらされています。私は上智大学大学院で学んで、世界的な現象である気候変動に適応し、軽減するための仕事に貢献したいと思っています。

APICインターン生受け入れ事業

短期インターン

APICと津田塾大学の間の教育連携に係る包括的な協定（Memorandum of Understanding）に基づき、大学のインターンシップ科目の就業体験として、2019年の8月～9月にかけて津田塾大学より1名のインターン学生がAPICでの実習を行いました。

APICでは2016年2月より、大学の夏期及び春期の授業休業期間中にそれぞれ約一カ月間、毎回数名のインターン学生を受け入れてきました。APICでのインターンシップでは、電話・来客対応や文書作成などの一般的な業務はもちろんのこと、外務省幹部などを講師に招いて行う講演会の運営や外国からの要人招待の際のアテンド補助など、様々な業務を体験します。



津田塾大学
学芸学部２年

三浦 梨乃 さん

今回経験させて頂いたAPIC事務所でのインターンシップでは、多くの業務を担当させていただきました。書類、スケジュールの英訳をしたり、新しく来日するザビエル留学生のフライトの手配や日用品の準備、９月に卒業した卒業生に贈るメッセージビデオの作成など、初めて行う業務に最初は戸惑っておりましたが、職員の方が丁寧に教えてくださったおかげで最後まで取り組むことができました。毎週月曜の全体ミーティングではAPICの事業の進捗状況を把握でき、その場で自分の担当しているプログラムが議題に上がると、事業の一部分に携わっているという実感を得られて嬉しかったです。同時に、与えられた仕事一つ一つの難易度は関係なく、等しく責任感を持って取り組むことが重要なのだと学びました。自らの業務だけでなく来訪者の方、上司の方への配慮も行える視野を持たなくてはならないと痛感しました。今回の貴重な経験を生かし、今後の大学生活を更に充実させることをお約束します。本当に有難う御座いました。

長期インターン

APICは、グローバル人材育成の一環として、国際協力の現場で問題解決能力を高めるために長期のインターン制度を設けています。これまで様々な大学からの学生が活躍しており、現在、国際基督教大学や上智大学からの学生がインターン生としてAPICの業務に携わっています。

国際基督教大学
教養学部４年

内海 風花 さん

APICのインターン生として活動を開始させて頂いてから約半年が経った今、自身のインターン生活がいかに実りあるものであるかを実感しています。

普段の業務内容は、日英文記事の翻訳、太平洋島嶼国地域・カリブ地域からの留学生への連絡、イベント・講演の案内状やフライヤー作成、情報収集等、多岐にわたります。さらに、台風の影響で今年度は開催中止になってしまいましたが、毎年10月中旬に行われる「Sawara Experience」※の企画運営にも携わらせて頂きました。オフィスでの業務は、国際協力関連の知識のみならず、社会人として必要となるスキルを習得する機会を提供してくれています。

その他にも、APICが毎月開催する早朝国際情勢講演会をはじめとする数多くのイベントに参加できる機会にも恵まれています。さらに、APICの職員さんとの交流を通し、大学での学びからは得られない知見を広げることができるのも魅力の一つです。

今このようにインターン生としてAPICに関わらせて頂けていることをとても光栄に思います。

高校生インターン

２０１９年７月24日から26日の間、高校生の飯田さやさんがＡＰＩＣインターン生として業務体験を行いました。

今回のインターンは、高校生が夏休みを利用して、自ら選んだ実習先で２日間以上の社会体験学習を行うという趣旨で実施されたものです。飯田さんはＡＰＩＣ事務所にて文書作成などの事務作業のほか、招待プログラムの準備を担当し、プログラム用の資料作りやメールで英語を使ったやり取りを行いました。

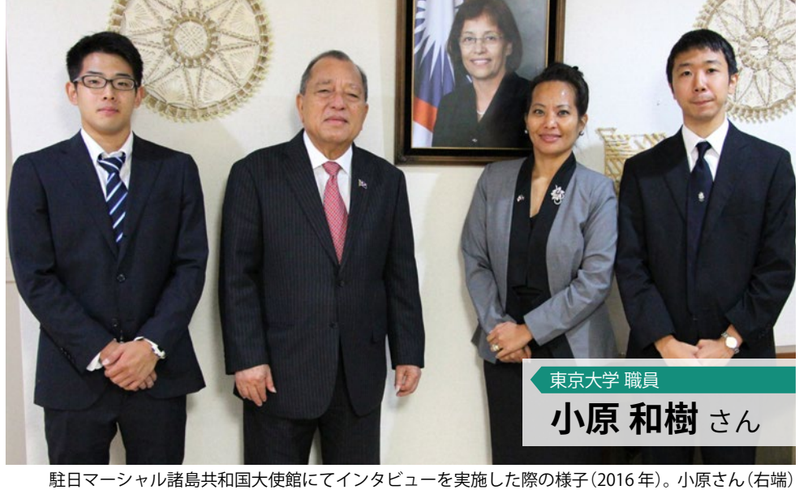
聖心女子学院高等科１年

飯田 さや さん

普段関わらない仕事場というものを実際に見て、そこで業務を経験させていただけたことは、自分にとってとても貴重な経験になりました。ビザ取得用の書類の作成や、英語を使ったメールは今まで学校で習ってきたことを実践につなげる良い機会となり、初めは不安になることもありましたが、タスクを終えることができた時には、自信につながりました。一番出来上がった時の達成感があった「チューク若手リーダー招待計画」の資料作成は、作業をするなかでどのような資料をどのような構成、配置で作ると良いのかを知る良い機会となりました。どのようにすれば見るのに適しているのか考えるのは楽しく、また、職員の方々と意見を交わしながら作成できたことなどが最後に完成した時の達成感につながりました。

このような普段はできない経験をさせていただき、APICで社会体験をさせて頂いたことにとても感謝しています。ここで学んだことを大切にし、また先にはなりますが、大学でのインターンにつなげていければと考えています。ありがとうございました。

※ APIC、株式会社エヌアイデイ（NID）、上智大学が共催する千葉県香取市の佐原を訪問する国際交流プロジェクト



駐日マーシャル諸島共和国大使館にてインタビューを実施した際の様子（2016 年）。小原さん（右端）

APICインターン OBの声 VOICE

APIC ではグローバル人材育成の一環として長期インターン生を受け入れています。
今回は、長期インターン生として APIC の事業に携わってきた**小原和樹さん**に、印象に残っているプロジェクトや、大学卒業後の進路について聞きました。

東京大学 職員
小原 和樹 さん

私は、元々、大学生の頃に大使館への学生インターンの派遣等を行う一般社団法人の一員として活動を行っていましたが、その中で知り合った大学の先輩の紹介で、一般財団法人国際協力推進協会（以下、ＡＰＩＣ）のインターンシップを知りました。過去に何度かイベントのお手伝いをさせていただいたという経緯から、ＡＰＩＣが支援を行っている太平洋島嶼国に関心があったこともあり、これらの国々に対してどのような支援を行っているのだろうかという興味から、学生インターンシップに参加することになりました。学部４年生から修士課程を卒業するまでの約３年間、様々な事業に直接的・間接的に関わりましたが、中でも特に印象に残っているのが、「早朝国際情勢講演会」への参加と「会報誌」の作成です。

「早朝国際情勢講演会」は、各国・各地域の国際情勢について、現役の外交官の方からお話を伺うことができる有意義な機会でした。ニュース等の情報源からではなかなか知ることが難しい各国の近況や、日本の外交動向について知見を深めることは、一学生として非常に刺激的な体験でした。また、ＡＰＩＣが支援を行っている地域が題材となることもあり、講演会で耳にした内容を、実際に事業を進めていく中で、実感を伴って理解することができる場面もありました。

「会報誌」の作成では、初号の刊行から担当していましたが、誌面の割振りや記事原稿の依頼等、スケジュールを踏まえた上で作業を並行して進めるという、仕事で基本となる流れを経験することができました。当時は、レイアウトの構成から記事に使用するインタビューまで、インターンの学生が主体となって関わっており、限られた出勤日の中で各担当者の進捗を逐一確認して記事を完成させるのに苦心することもありましたが、自分たちのまとめた記事が、実際に「冊子」として発行された際には、大きな達成感がありました。また、年々会報誌に掲載される内容が増えていくことを通して、各種事業が拡大・発展していることを実感することもでき、ＡＰＩＣに所属するインターン生として、嬉しく感じたことを覚えています。

私は現在、大学職員として、研究費や研究交流事業の申請・報告等に携わっています。大学職員を志した理由の一つに、ＡＰＩＣへの出向者や、留学生事業、インターン制度などのカウンターパートとしてＡＰＩＣに関わる多くの大学関係者の方々を目にする中で、職員として教育・研究を支援することに関心を持つようになったことが挙げられます。大学で提供されている留学コースや国際交流プログラムがどのようにして運営されているのかという点について、普段大学生として生活する中では、ほとんど知る機会がありません。こうしたプログラムの「裏側」を見ることができたのは、インターンに参加した中でも非常に興味深い体験であったと感じています。

また、近年、大学が「国際化」に力を入れていく中で、大学職員にも国際的な感覚が求められるようになっています。私が担当している研究支援に関する分野の業務でも、ここ数年で外国人の学生・研究者とやり取りを行う機会が徐々に増えてきていますが、研究者の受入れや交流プログラムを実施を進めていく中で、ＡＰＩＣでの経験と重なる場面が多々見受けられます。特に、滞在中の研究者・学生の歓待や大使館とのやり取りを行う際に、インターン生として身に付けた知識やコミュニケーションの在り方が大きく寄与していると感じられます。

今後もＡＰＩＣインターン生として身に付けた国際的な視野を活かして、大学職員として、学生・研究者をサポートし、大学の国際化・研究の発展に貢献していきたいと思います。

APIC 早朝国際情勢講演会

毎月１回（８月以外）開催される**APIC 早朝国際情勢講演会**では、外務省幹部、在外大使などを講師としてお迎えし、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。現職の外務事務次官や外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。本講演は、APIC 維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細につきましては、本誌裏表紙に記載している APIC 事務局の連絡先にご照会ください。

APIC 役員名簿

※ 2020 年 1 月 1 日現在

◆役員

理事長	**佐藤　嘉恭**	（最終官職：駐中華人民共和国特命全権大使）
常務理事	**佐藤　昭治**	（最終官職：駐ミクロネシア日本国特命全権大使（兼パラオ・マーシャル諸島））
理事	**荒木　恵**	一般財団法人国際協力推進協会　事務局長（最終官職：財務省 国際局局付派遣職員（アジア開発銀行））
理事	**今野　秀洋**	一般財団法人貿易・産業協力振興財団　理事長（最終官職：経済産業審議官）
理事	**重家　俊範**	東レ株式会社　顧問（最終官職：駐大韓民国特命全権大使）
理事	**芳賀　達也**	一般社団法人太平洋協会　事務局長
理事	**鳥飼　玖美子**	一般財団法人港区国際交流協会　理事長
理事	**村上　洋**	味の素株式会社　社外監査役
理事	**山本　達也**	エーオンジャパン株式会社　代表取締役社長
監事	**金成　憲道**	ドイツ証券株式会社　元取締役会長
監事	**吉川　英一**	三菱 UFJ 銀行　顧問

◆評議員

評議員	**石堂　一成**	東京コンサルティング株式会社　代表取締役社長
評議員	**坂本　吉弘**	一般財団法人安全保障貿易情報センター　理事長（最終官職：通商産業省 通商産業審議官）
評議員	**炭谷　茂**	社会福祉法人恩賜財団済生会　理事長（最終官職：環境省 事務次官）
評議員	**渋澤　健**	コモンズ投信株式会社　取締役会長
評議員	**島内　憲**	元駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員	**廣野　良吉**	成蹊大学　名誉教授
評議員	**舟木　いさ子**	ヤクモ株式会社　取締役
評議員	**本多　義人**	東神インターナショナル株式会社 名誉会長

ザビエル学生留学奨学金

◆ ご寄附のお願い ◆

「ザビエル高校留学生奨学金制度」は、上智大学の留学生基金の他、皆様の APIC へのご寄附により、2019 年 12 月現在、総額約 8,858 万円をお預かりいたしました。皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。皆様に御礼申し上げますとともに、本留学生奨学金制度への更なるご支援をお願いいたします。

ザビエル高校 (Xavier High School) とは…
1952 年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立された。4 年制の男女共学で、生徒の数は約 150 名。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集う。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、過去の卒業生には、モリ元大統領やクリスチャン元大統領をはじめ、この地域の政界･経済界のリーダーを輩出している。

対　象　ザビエル高校卒業生　毎年1～2 名
留学先　上智大学国際教養学部、理工学部など
奨学金　卒業までの４年間の奨学金を授与

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等とかなりの額にのぼることが見込まれます。皆様からのご協力をお願い申し上げます。

銀行振込先
三菱 UFJ 銀行　本店（店番 001）　普通口座 1660339
口座名：一般財団法人　国際協力推進協会　奨学金募金口
カナ名：ザイ）コクサイ キヨウリヨク スイシン キヨウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

一般財団法人 国際協力推進協会（APIC）

事務所移転のお知らせ

この度、一般財団法人 国際協力推進協会は、事業拡大および人員の増加に伴い、
2019 年 9 月 17 日より下記の住所に事務所を移転いたしました。
これを機にさらに事業の充実を図り、一層の努力を重ねてまいる所存です。
今後ともご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

〒 102-0094
新住所 東京都千代田区紀尾井町 6-12
紀尾井町福田家ビル（上智大学四谷キャンパス 13 号館）3 階

JR 中央線、東京メトロ丸ノ内線・南北線「四ツ谷」駅　麹町口・赤坂口より徒歩約 6 分
ソフィア通りに面した入口からお入りください。
上智大学のキャンパス内からは入れませんのでご注意ください。

APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省幹部・大使による **APIC 早朝国際情勢講演会**を
自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。
詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場 所 ホテルオークラ東京　会議場
時 間 午前 8:30 ～ 10:00（朝食付き）

お問い合わせ TEL：03-5577-2900
MAIL：apicinfo@apic.or.jp

■ 発行人
佐藤　嘉恭　（理事長）

■ 発行日
令和 2 年 1 月 1 日

■ 発行所
一般財団法人 国際協力推進協会
〒 102-0094
東京都千代田区紀尾井町 6-12
紀尾井町福田家ビル 3 階
TEL : 03-5577-2900 / FAX : 03-5577-2901
MAIL : apicinfo@apic.or.jp

■ 編集
編集長　芳賀　達也　（理事）
副編集長　加藤　奈美
斉藤　拓馬
編集　喜多　萌子
金原　弘恭
APIC インターン生　内海　風花　（国際基督教大学）
松並　佑芽　（上智大学）
三浦　梨乃　（津田塾大学）
なんぺい　よりこ　（テンプル大学ジャパンキャンパス）